

八 所 宮

福岡県宗像市吉留所在遺跡の発掘調査報告

宗像市文化財調査報告書

第31集

1991

宗像市教育委員会



HA SSYO GU
八 所 宮

福岡県宗像市吉留所在遺跡の発掘調査報告

宗像市文化財調査報告書 第31集



1991

宗像市教育委員会

序 文

宗像市は福岡市・北九州市の中間に位置し、両大都市への通勤圏となっており、両政令都市の結節都市としての様相を濃くしています。

本市はこのような状況のなかで、「学術・文化都市」としての将来構想実現へ向けて着実に歩みを続けています。

宗像市と鞍手郡鞍手町との境に近く、市の中央を貫流する釣川の源にあたる位置に所在する八所神社は、かつて八所宮と呼ばれ、由緒ある神社として近在近郷の信仰をあつめて現在に至っていますが、これまでに幾度かの災難により数多くの古文書をはじめとする貴重な資料が散逸していった経緯があります。このため、神社の歴史は多くの謎を秘めたままになっております。

宗像市文化財保護条例の施行を機に、文化財専門委員会による八所神社の調査が始まり、これに並行して、考古学的調査による神社の創建等を明らかにする目的で3カ年にわたり発掘調査を実施し、幾許かの成果をあげることができました。

今回の調査は、部分的な調査に留まっており、遺跡の全体像を明らかにすることはできませんでしたが将来的な遺跡解明への手掛かりとなれば幸いと考えます。

本書が広く文化財の保護および学術研究の一資料として貢献することを念願するとともに、発掘調査においては八所神社をはじめ、ご協力いただいた数多くの方々に心から感謝の意を表する次第であります。

平成3年3月30日

宗像市教育委員会

教育長 森 下 照 清

例 言

1. 本書は、宗像市教育委員会が事業主体となって昭和63年度から平成2年度にかけて国庫補助を受けて実施した発掘調査の報告である。
2. 遺構の実測・写真は原俊一・安部裕久が行い、遺物は安部が実測した。
3. 遺構・遺物の製図は廣橋久美が、遺物の整理は法泉順子・高木成子・荒木由美子・橋本加代子が行った。
4. 遺跡周辺の植生については梅田政良氏に資料の提供をいただいた。
5. 本書の付編として、宗像市専門委員会の悉皆調査による文化財資料を掲載した。
6. 本書使用の方位は磁針である。
7. 本書の執筆は3の3)を安部が、他は原が行った。編集は原が行った。

本文目次

1. はじめに	1
1) 調査に至る経過	1
2) 調査の概要	1
2. 位置と環境	3
3. 発掘調査の記録	6
1) 各トレンチの調査	6
2) 遺構の調査	13
3) 出土遺物	16
4. まとめ	30
5. 遺跡周辺の植生	32
付編 八所神社の文化財	33

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図 (1/50,000)	5
第2図	1トレンチ土層図 (1/80)	6
第3図	2トレンチ実測図 (1/80)	6
第4図	遺跡測量図 (1/400)	7
第5図	3トレンチ実測図 (1/80)	8
第6図	4トレンチ実測図 (1/80)	8
第7図	5トレンチ実測図 (1/80)	9
第8図	6トレンチ実測図 (1/80)	9
第9図	7トレンチ実測図 (1/80)	10
第10図	7・8・9トレンチ実測図 (1/80)	10
第11図	10トレンチ実測図 (1/80)	11
第12図	11トレンチ図 (1/80)	11
第13図	12トレンチ実測図 (1/80)	12
第14図	長宝寺1・2トレンチ土層図 (1/80)	12
第15図	2トレンチ遺構実測図 (1/40)	13
第16図	6トレンチ遺構実測図 (1/40)	14
第17図	S T 20遺構実測図 (1/30)	15
第18図	S X 21・22・28遺構実測図 (1/40)	17・18
第19図	土師器実測図1 (1/3)	19
第20図	土師器実測図2 (1/3)	21
第21図	須恵質土器及び陶磁器実測図 (1/4・1/3)	23
第22図	軒丸瓦実測図 (1/3)	24
第23図	弥生時代遺物実測図 (1/3・1/2)	25
第24図	土師器の法量分布図 (単位: cm)	26

図版目次

図版1 遺跡と周辺の航空写真 (1/12,500 1978年6月撮影)

図版2 全景写真 (西から) 拝殿の南側敷地 (西から) 拝殿の北側敷地 (西から) 1トレンチ (北から) 2トレンチ (西から)

図版3 3トレンチ (北から) 4トレンチ (南から) 5トレンチ (東から) 6トレンチ (西から)

図版4 7トレンチ (南から) 7トレンチ (北から) SX22・S T20 (南から) SX21・22 (南から) ST20 (東から) ST20掘り方 (東から)

図版5 SX21・22・28 (南から) SX21・22・28 (東から) SX22・28 (東から) 11トレンチ (北から) 12トレンチ (南から)

図版6 長宝寺 (西から) 長宝寺観音堂 (北から) 長宝寺1トレンチ 長宝寺2トレンチ

図版7 出土遺物1

図版8 出土遺物2

図版9 木造十一面観音立像 木造不動明王立像 木造十一面観音立像 木造大威德明王騎牛像 木造不動明王像 木造天部形立像

図版10 木造天部形立像 木造狛犬 木造狛犬 木造狛犬 木造狛犬 木造鼻高面 木造翁面

図版11 木造鬼面 木造男神面 獅子頭 獅子頭 梵鐘

図版12 絵馬

1. は じ め に

1) 調査に至る経過

1985年9月26日に宗像市文化財保護条例が施行された。これを受け昭和61年から東郷高塚前方後円墳の発掘調査に着手した。これと並行して文化財専門委員会による八所神社の悉皆調査がすすめられたが、当社の創立等に関する古文書などの資料が皆無に近い状態であることがあきらかとなり、有形文化財や建築等の調査と連動する形で考古学的調査の必要にせまられた。

このような状況から、当宗像市教育委員会としては古代から中世の宗像史を解明する目的として昭和63年から3カ年にわたって国・県の補助を受けて、重要遺跡確認調査を実施した。

事業は次のとおりの組織で実施した。

総 括 宗像市教育委員会	教 育 長	森 下 黒 清
	教 育 部 長	白 木 国 明 (63年度)
		山 田 政 信
	社会教育課長	吉 田 繁 利
	文化係長	尾 山 清
庶務・会計	主 事	大 賀 由美子 (前任)
		猪 原 紗 代 (前任)
		北 野 隆 文
発掘調査	主 事	原 俊 一
	技 師	安 部 裕 久
調査指導 大宰府市教育委員会	文化財技師	狭 川 真 一
大宰府天満宮文化研究所		小 西 信 二
北九州市埋蔵文化財調査室		佐 藤 浩 司

発掘調査において、八所神社をはじめ多くの方々の指導・助言・応援をいただいた。また、雪や寒風の中での調査に参加いただいた作業員の皆さんには心から謝意を申し上げます。

整理に当たっては太宰府市教育委員会の山本信夫氏に、遺物について多くの教示をいただき、無事に報告までたどりつくことができた。

2) 調査の概要

境内地は長年の月日による苔等が繁茂しており、調査は埋め戻しまで神経を使った。各年次の調査概要は次のとおりである。

八 所 宮

初年度 1989年1月25日～3月31日

周辺の1/100地形測量、本殿・拝殿の南側の調査（1～3トレンチ）、参道南側の調査（4～5トレンチ）を行った。

各トレンチとも上師器を大量に含む包含層が確認できた。トレンチ内には小土壙がみとめられたが、建物を構成する遺構かどうかは明らかにできなかった。

2年度 1989年12月1日～1990年3月31日

前年の成果から拝殿の南北に6・7トレンチを設定した。とくに、7トレンチにおいて石積み遺構と裏込にあたる空間の地山に据える形で底部を打ち欠き、口縁部を叩き割った須恵器の埋め甕が検出できた。補足調査として八所神社に隣接する十一面觀音像が収まっている長宝寺の境内にトレンチを設定したが、盛られた真砂土が約1mあり、遺構、遺物を認めることはできなかった。

3年度 1991年1月16日～1991年3月30日

前年の成果から7トレンチを拡張を行い、石積遺構の追跡をした。また、拝殿の西側に石積遺構の延長部トレンチを設定した。この結果数度の立て替えを確認することはできたが肝心の当社の創建にかかる遺構をつかむことはできなかった。

2. 位置と環境

本市は福岡市と北九州市のほぼ中間に位置し、宗像市郡の内陸部を占める。北から東、さらに南に向かって孔大寺（こだいし）山・金山・城山・戸田山・新立山・磯辺山・許斐山の山塊に囲まれて宗像盆地を形成する。

西側は釣川の開析により、沖積地がつくられて玄海町神湊で玄海灘に注ぐ。釣川は盆地中央を東西に貫流し、水源は市東部の吉留である。

宗像盆地は地形からくる水量の少なさを溜池で補っている。^{註1}市域の地質は遠賀郡境の產地が下関亜層群、鞍手郡境の山地は駒野亜層群、市の北部、東部、南部は花崗閃緑岩。市域の北西から東南方向に走る山地は宗像層群であり、河東周辺には玢岩が見られる。盆地の中央は沖積平野を形成する。^{註2}

遺跡は市の東端部にあって、遠賀郡岡垣町との境にある戸田山（267.4m）から南へ派生する丘陵先端に位置する。遺跡周辺は交通の要衝にあり、東に向かうと郡境の猿田峠を越えて鞍手郡の新延に至る、北に向かうと遠賀郡の海老津に抜けるが、峠を下る途中に八所宮を鎮守とする十一ヶ村の1つ、上畠の集落がある。また南へ向かうと鞍手郡宮田町の倉久に抜ける。

八所宮の所在する吉留（よしどめ）の由来は、神武天皇の東征の折、赤馬に乗って当地の民を従わせ、さらにこの地に留まつたので吉留という地名となつたとの言伝えがある。^{註3}

明治15年福岡県による町村の小字調べによると、吉留に高六（たかろく）・猿田（さるだ）・平山・松丸・中ノ尾・本村・宮ノ尾・安ノ倉（あんのくら）・白土郷（しらつちこう）の9カ所の小字名が見える。^{註4}

吉留村の歴史は天文22年（1553年）に「吉留村」が出てくる。^{註5}文禄田畠帳には「吉富村」とあり、慶長の検地帳は「吉留村田畠116町」また、慶長図・正保図には「吉富」、元禄・天保郷帳には「吉留」とある。^{註6}

近世には福岡藩領宗像郡徳重郷に属する。

明治22年に吉武村となり、昭和29年には宗像町となり、昭和56年から大字名となる。

遺跡の東南1kmの標高33mの丘陵先端にある吉留下惣原遺跡A区の包含層から縄文晩期の遺物が出土し、市域ではじめての縄文時代遺跡が確認された。^{註7}これ以後縄文時代遺跡は発見できず、わずかに1991年に調査された城ヶ谷62号墳下の包含層から刻目突堤を持つ甕の出土が知れる程度である。吉留下惣原A・B区からは掘立柱建物跡が検出されており、時期的には6世紀後半から7世紀前半の倉庫群ということであり、この時期の吉留における穀倉を形成したものと考えられる。この時期の古墳は小谷を挟んだ南西側の丘陵上に群の形成がある。

八所宮の南約1kmに位置する標高30mの丘陵にある吉留京田遺跡は、南北に長く分布し、弥生時代中期から6世紀にかけての大集落である。^{註8}全体に削平を受けて遺存状態が悪かっ

たが、集落の密度は濃い。弥生時代後期に櫛棺墓が3基見られ、この時期の遺構、遺物の初検出となった。

吉留京田遺跡から西方の字高田と字小伏の丘陵上には4～6世紀を中心とする住居跡が検出された。^{註9} この内の武丸高田遺跡から住居内に鐵冶炉を備えた6世紀後半の方形竪穴式住居跡が確認された。

武丸小伏遺跡のある丘陵を南へ300mほど南下すると武丸町添遺跡の古墳群が分布している。^{註10} 7基の古墳が調査されてほぼ6世紀全般にわたる築造がなされ、3～4群の単位の古代家族の存在が考えられる。

武丸小伏遺跡の背面の丘陵には古墳群が林地内に認められる。

武丸町添遺跡から南下した標高83mの丘陵西側緩斜面から火葬土壙が2基検出された。^{註11} これらの遺構は武丸町添遺跡の火葬土壙と密接な関係にあるものといえる。出土の土師器から16世紀前半が考えられ、大内氏の筑前国支配を考古学的に知りうる重要な遺構である。

吉留の西には大字武丸がある。武丸の北部、城山越の裾にあたる武丸大上げ遺跡^{註12}は大型の掘立柱建物と大量の瓦が出土しており、8世紀後半から9世紀前半の時期という推定から、遺跡の性格について2通りの説が提起されている。^{註13}

註1 正木喜三郎 1988 宗像市 角川日本地名大辞典 40 福岡県

2 経済企画庁総合開発局 1970 福岡県地質図 土地分類図 40

3 築前国続風土記拾遺 吉留村八所明神の項

4 伊東尾四郎 1944 宗像都誌 下

5 宗像御代武家知行帳写

6 前掲註4の上巻 吉留の項

7 宗像市教育委員会 1987 埋蔵文化財発掘調査報告書—1986年度— 宗像市文化財調査報告書第12集

8 宗像市教育委員会 1986 埋蔵文化財発掘調査概報 宗像市文化財調査報告書 第10集

9 宗像市教育委員会 1985 埋蔵文化財発掘調査報告書 宗像市文化財調査報告書 第9集

10a 宗像市教育委員会 1989 武丸町添遺跡 宗像市文化財調査報告書 第20集

b 宗像市教育委員会 1990 武丸町添 宗像市文化財調査報告書 第28集

11 宗像市教育委員会 1988 武丸原 宗像市文化財調査報告書 第17集

12 宗像市教育委員会 1984 埋蔵文化財発掘調査概報—1983年度— 宗像市文化財調査報告書 第7集

13a 日野尚志 1987 西海道における大路（山陽道）について 九州文化史研究所紀要32号 古代の駅家とする説である。鳴門駅と津日駅（珪町遺跡を比定）の中間にあって文献には登場しない駅家としている。

b 正木喜三郎 1990 田野別府考 福岡地域史研究 9号 遺跡は院倉跡とする説である。武丸は赤間荘域内にあり、近くには国領赤間院がある。赤間荘立券以前に郡倉が置かれていたこと。また、氏は津日駅については玄海城江口の津日の浦を当てている。

八 所 寓



1. 八所宮遺跡	2. 吉留下惣原遺跡	3. 吉留京田遺跡
4. 武丸小伏遺跡	5. 武丸高田遺跡	6. 武丸町添遺跡
7. 武丸原遺跡	8. 武丸大上げ遺跡	9. 武丸皆真庵遺跡

第1圖 周邊邊緣分布圖 (1/50,000)

3. 発掘調査の記録

調査の方法

境内の現況測量により、方眼を設定して方眼の軸に従つてトレンチを開けた。各トレンチの調査成果をふまえて、次年度には拡張区を設けて遺構の拡がりを追求する方法をとった。

現 状

宗像市内では、最も多くの信仰をあつめている神社であり、境内の背後の森は樹々が鬱蒼として豊かな暗く、神秘性を有している。これらの樹木の中で、トキワガキとイチイガシは県の天然記念物に指定されている。

1) 各トレンチの調査

1トレンチ (第2図)

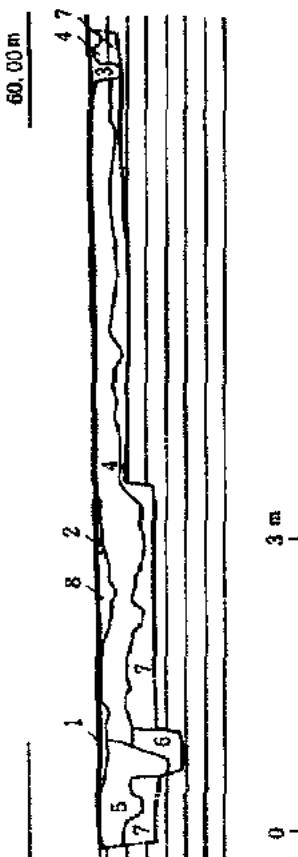
拝殿の南側に南北に長く8.5mのトレンチを設定した。境内を覆っている細かい砂利を除くと、細片の土器を含む包含層が出てきた。この包含層は厚さ20~40cmほどあり、包含層下は粘質の凹凸のある地山となる。図では第4層が土器包含層である。トレンチ西壁の土崩壁に柱穴状の落込みが1カ所見られ、隣接して第2トレンチを設定する契機となった。

2トレンチ (第3図)

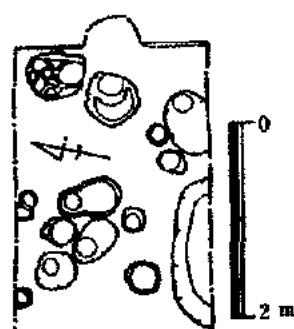
1トレンチの南側西壁で確認した小豊穴から、遺構が西側に分布する可能性から、約6mの拡張区を設定した。トレンチ内の土層は1トレンチと同様の堆積であった。包含層を除去した地山面に多数の柱穴と考える小豊穴群が検出された。各小豊穴の残存は悪く、明瞭な遺物の出土もなく、遺構をつかみうるほどではなかった。このトレンチの南壁にかかる精円形の土壙が1基確認したが、性格等は不明である。

3トレンチ (第5図)

本殿の南側で、南北に長く約8.5mのトレンチを設定した。表土を含めて厚さ20~30cmにわたり砂利の互層が認められ、その下は地山となり遺物包含層は存在しない。トレンチ内の地山

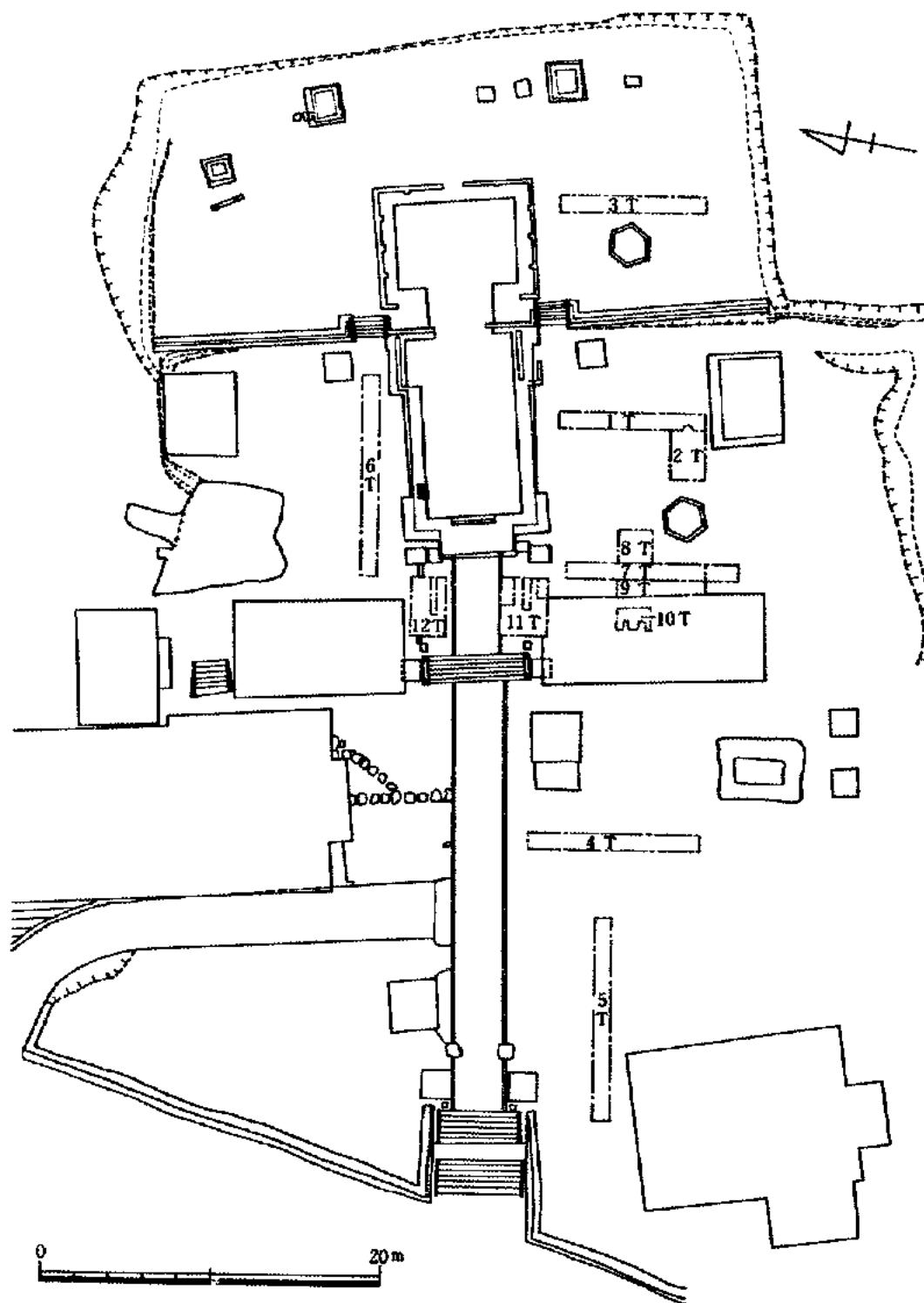


第2図 1トレンチ土層図 (1/100)



第3図 2トレンチ実測図 (1/100)

八所宮

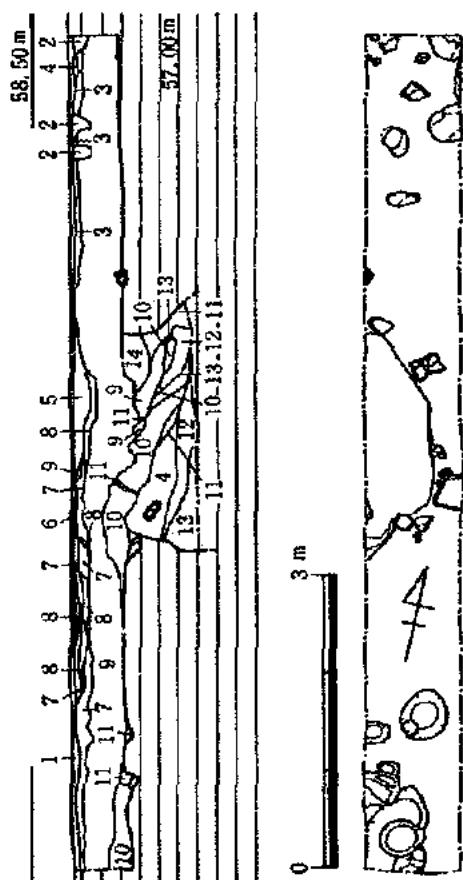


第4図 遺跡測量図 (1/400)

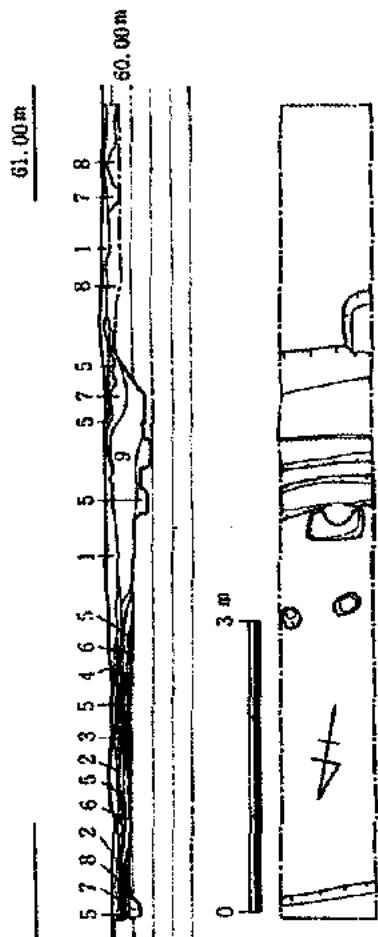
面で溝2本、小整穴4カ所を検出したが残りが悪く、遺物も出土していない。

4トレンチ (第6図)

参道の南側で、南北約8.5mの長さにトレンチを設定した。表土下20cmほどは砂利を含む層であり、その下層に厚さ40cmほどの塊石を含む堆積がある。表土下50~60cmで地山に到達するが、この地山面は平坦であり、直上に多数の塊石を認めることから、このトレンチは整地による堆積層を示すものと考えうる。トレンチの中央部で円形の豊穴が検出された、一見、弥生時代の袋状豊穴を思わせるが、かなりの深さとなるた



第6図 4トレンチ実測図 (1/80)

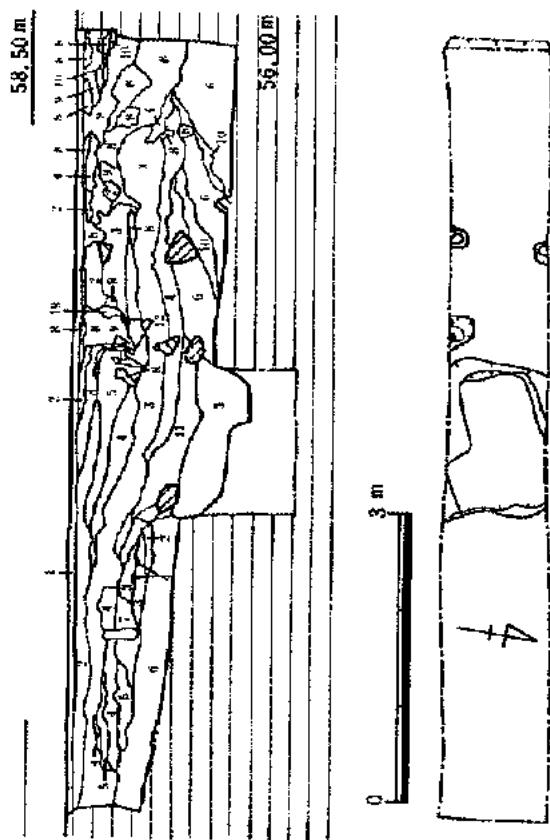


第5図 3トレンチ実測図 (1/100)

め、中途で発掘を断念した。この豊穴の性格は不明である。

5トレンチ (第7図)

参道の南側で道筋に並行する東西に長いトレンチを設定した。東側では表土下60cmほどで地山に達したが、トレンチの中央で突然地山が落込み、地山を追いかけるのは不可能となつた。このトレンチは4トレンチと同様に整地層からなり、境内拡張のためのものと言える。



第7図 5トレンチ実測図 (1/80)

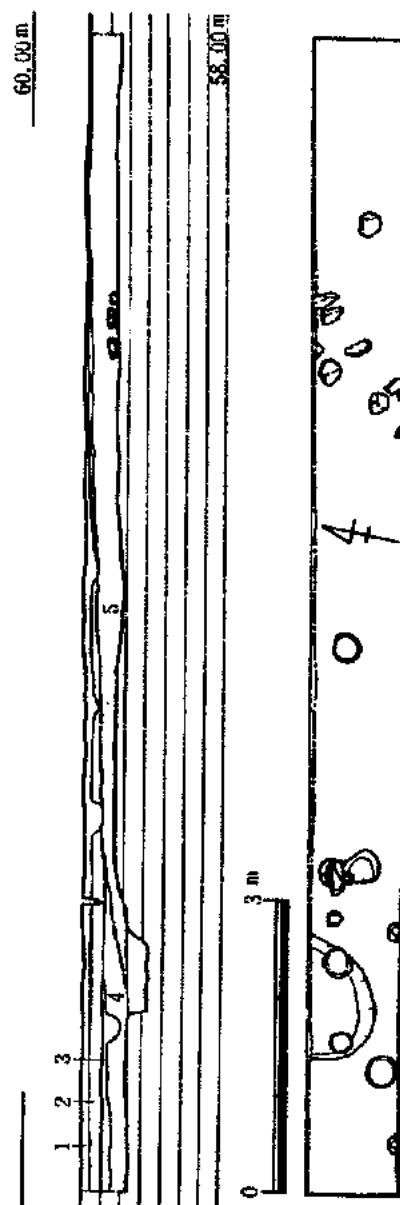
地山面は平坦となっている。トレンチの東側の地山上に塊石が多く認められたが、意図的に配置した様子はない。このトレンチの西半部で、地山面に土壌および小堅穴群が検出された。

7トレンチ (第9図)

拝殿の南で、絵馬堂の東に隣接して南北に長いトレンチを設定した。表土下20cmは砂利を含む境内整地層となっている。6~10層の内、9層が黄褐色の地山削出しの汚れのない土層であるほか、全体に明るい褐色土の軟かい堆積土である。特に7層には面に光沢を有する瓦が含まれる。13層は最大80cmの包含層であるが、茶褐色で良くしまっており多量の土器を含む土層である。13層の下は地山が現われて、平坦となっている。このトレンチでは、北側で地山

6トレンチ (第8図)

拝殿の北側で、東西に長いトレンチを設定した。表土下20cmほどは境内整地層となっている。3~5層の20~30cmの厚さに土器が多量に含まれている。



第8図 6トレンチ実測図 (1/80)

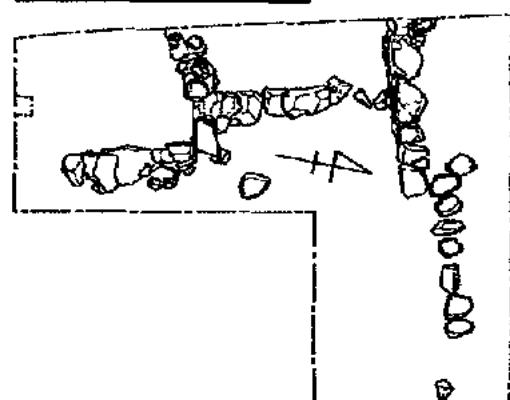
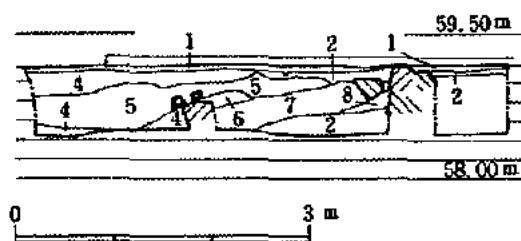
に埋め込まれた須恵質の甕が検出された。また、中央部では化粧面を南に向けた石積みが東西に走っている。中央からやや南では化粧面を西と南に向けるL字形の石積みが検出され、建物の基礎造構の可能性がある。

8 トレンチ (第10図)

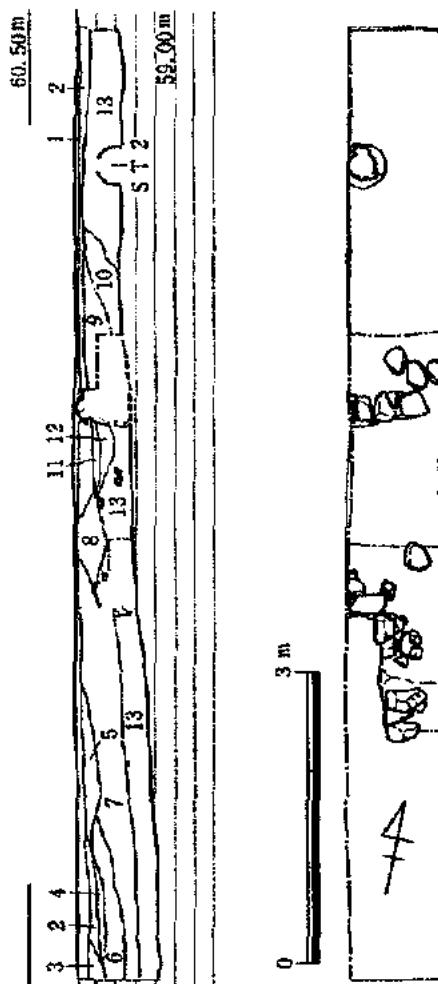
7 トレンチ石積みの東側延長部を探すための拡張トレンチである。表土下すぐに塊石の列が現われた。この列は7 トレンチ石積みを連続する土層中に配置が認められた。塊石列の下部については未調査である。塊石は全部で9個が一列に配置されてはいるが、7 トレンチ石積みの面とは30cmほどのズレがあり、配石自体も各配石間には隙間が認められ、組み合ってはいない。

9 トレンチ (第10図)

7 トレンチの石積造構を西側へ拡張したト



第10図 7・8・9トレンチ実測図 (1/80)



第9図 7トレンチ実測図 (1/80)

ンチである。東西に走る石積みは連続して検出されて、絵馬堂の下へ続いている。また、L字形の石積みは、中途で北へ延びる石積みとなり、東西へ走る石積みによつかる形となる。これとは別にL字形の西へ延びる石積みも連続して認められ、絵馬堂の下へと続く、トレンチ西壁の土層をみると、東西に走る石積みの最下段の石は地山面から20cmほど浮いて

おり、この石の下部土層は明るい褐色の土層で、7トレンチ西壁で見られた上部の軟質土層に連続していることがわかる。南側のL字形石積みのうち、西へ延びる石列の最下段の石も地山からは、10cmほど浮いている。この地点の土層中には光沢を有する瓦片が見られた。

10トレンチ（第11図）

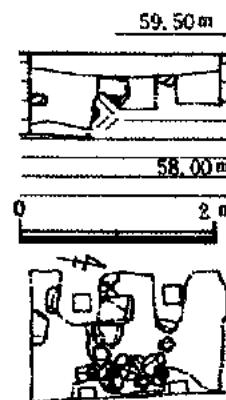
7、9トレンチで確認された東西方向に走る石積みの拡張トレンチである。絵馬堂の下で西側へのびており、調査区外へさらにのびている、こここの石積みの最下段の石は地山から浮いており、9トレンチと同様の在り方となっている。石積みは2～3段分が残っているが、少しくずれている。

11トレンチ（第12図）

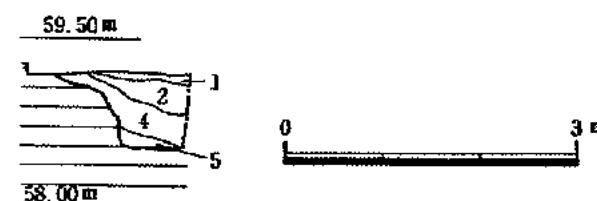
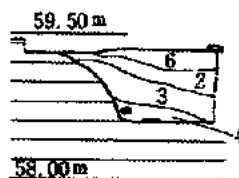
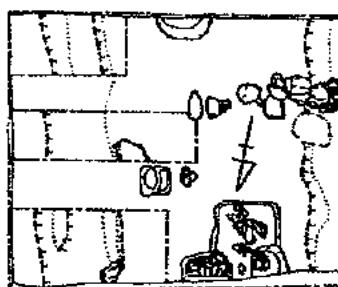
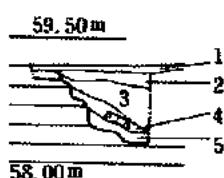
7トレンチで南側の石積みが北へのびて、東西方向の石積みにぶつかっていたが、この北へのびる延長線上にトレンチを設定して7トレンチから連続する石積みがあるかの調査を行った。表土下すぐで東西に走る石列、および、竪穴群を検出した。これらの整穴は7～10トレンチにおいて石積みの基礎となる明るい褐色土の上から掘り込まれており、時間的には最も新しい遺構と言える。トレンチの東半部において、東西方向に3本のミニトレンチを開けて土層を確認した。この結果、3本のトレンチを真直ぐにつなく、茶

褐色の土層上端線と地山の縁が検出された。地山縁の延長線は7トレンチの南北に走る石積みの線に一致することがわかった。茶褐色の遺物を包含する土壇状の堆積の外側埋土からは光沢を有する瓦の出土があった。

12トレンチ（第13図）

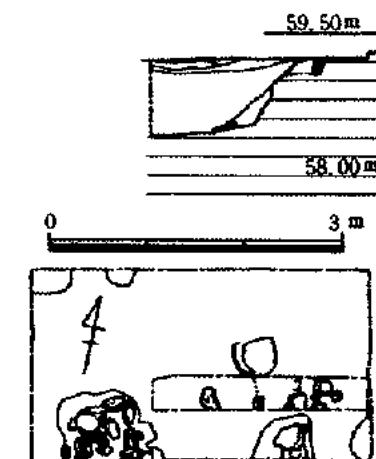
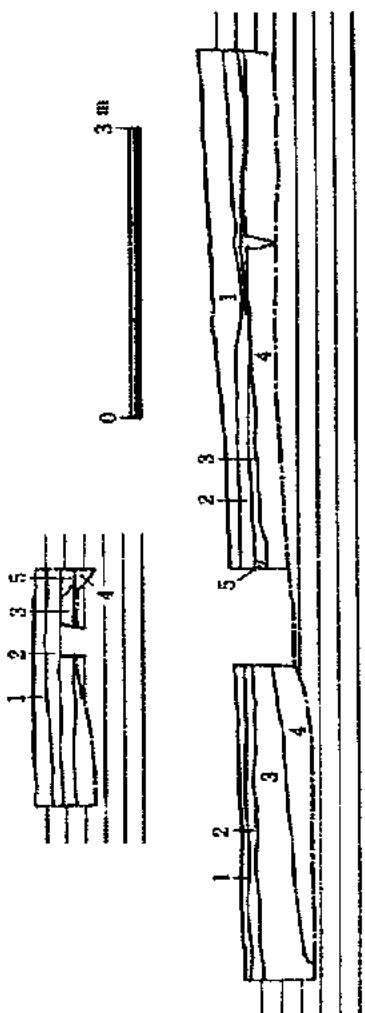


第11図 10トレンチ実測図 (1/10)



第12図 11トレンチ実測図 (1/10)

拝殿の参拝道の北側で、11トレンチから延長する土壙を確認するためのトレンチを設定した。表土下に検出された豊穴は11トレンチと同様の最も新しい時期のものである。あるいは、かつて横門があったと伝えられており可能性があるといえる。トレンチの中央で東西方向のミニトレンチを開けて土層を見たが11トレンチの延長上に土壙状の堆積が東から西へ急に落ち込み、この土壙状の堆積は地山を30cmほど段状に削り出した上にのっていることがわかる。



第13図 12トレンチ実測図 (1/10)

長宝寺トレンチ (第14図)

八所宮境内の南に長宝寺（長福寺）とよばれる観音堂が現存している。この堂内には県指定文化財の十一面観音立像があり、八所宮との関わりが強いことから、堂の南に接して2本のT字形トレンチを設定した。表土下40cmで花崗岩風化土の地山に達した。全体に整地土層となっており、地山面においても遺構の検出はできず、出土遺物も皆無であった。言伝えによると本遺跡の西に戸田山があり、ここにかつては寺院があったという。この地から掘り出した観音像を現在地に安置したという記載がある。^{*} ただ、この地はもともと長宝寺といわれており、今後近隣に寺院跡が発見される可能性がある。

^{*} 宗像都誌 上巻

第14図 長宝寺1・2トレンチ土層図 (1/10)

2) 造構の調査

12のトレンチ調査において、造構が顕著なのは2・6・7~10トレンチであった。位置でいえば、拝殿の南北と西側の繪馬堂部分である。本殿部分の敷地は現在の本殿建造時の削平による平坦面であろう。以下、代表的造構について述べる。

SK 1 土壙 (第15図)

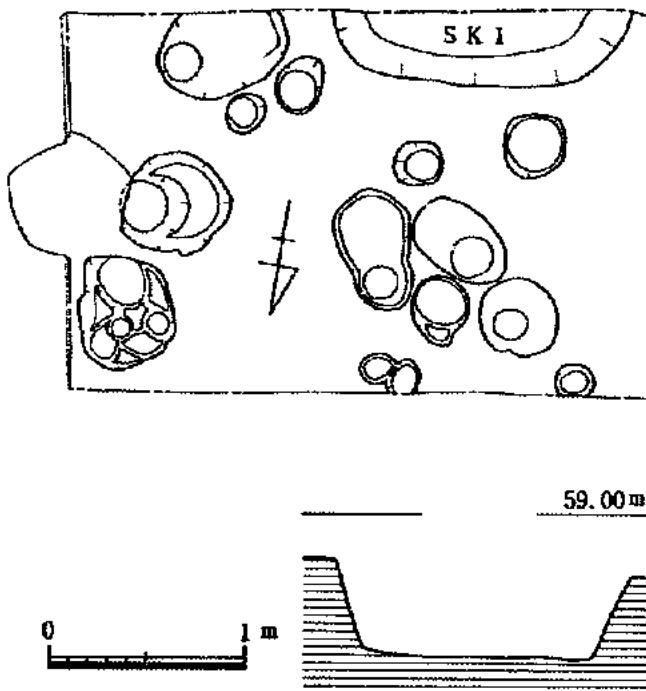
2トレンチの南壁際にかかって検出された。全掘できておらず全体を明らかにできないが平面は楕円形を呈しており、長軸で155cmを測る。深さは45cmあり床面は平坦となる。壁の立ち上がりは直線的となる。土壙内から土師器の杯・小皿・陶磁器が出土した。造構の性格は不明である。

SK 19 土壙 (第16図)

6トレンチの地山から掘り込まれた土壙である。造構検出は半分ほどに留まつたが、楕円形の掘り込みをもつ。東西方向に最大130cmを測る。深さは約20cmあり、床面は平坦で、壁の立ち上がりは直線的となる。土壙内の床に直径20cmの円形掘り込みが検出された。深さは20cmあり、底面は平である。土壙内から土師器の杯と小皿の出土があった。

ST 20 (第17図)

7トレンチの北側で、西壁にかかって検出された埋納壺である。地山を直径50cm、深さ15cmに掘り込み、須恵質の壺を正立させて据えている。壺を据える際に体部下半を打ち欠いて土器の安定を図っている。体部下半の遺物はトレンチ内には認めることはできなかつた。調査時には口頸部の大部分は壺の内部で検出された。壺の頸部内側は全体に敲打による器面剥離が認められることから、据えた後、何らかの行為を行つた後に口頸部を打ち割つたものであろう。体部下半を欠く



第15図 2トレンチ造構実測図 (1/48)

ことから水容器としての役目は果たせない。甕内部には土師器の細片を出土するほかは何も見い出せなかった。

S X21 (第18図)

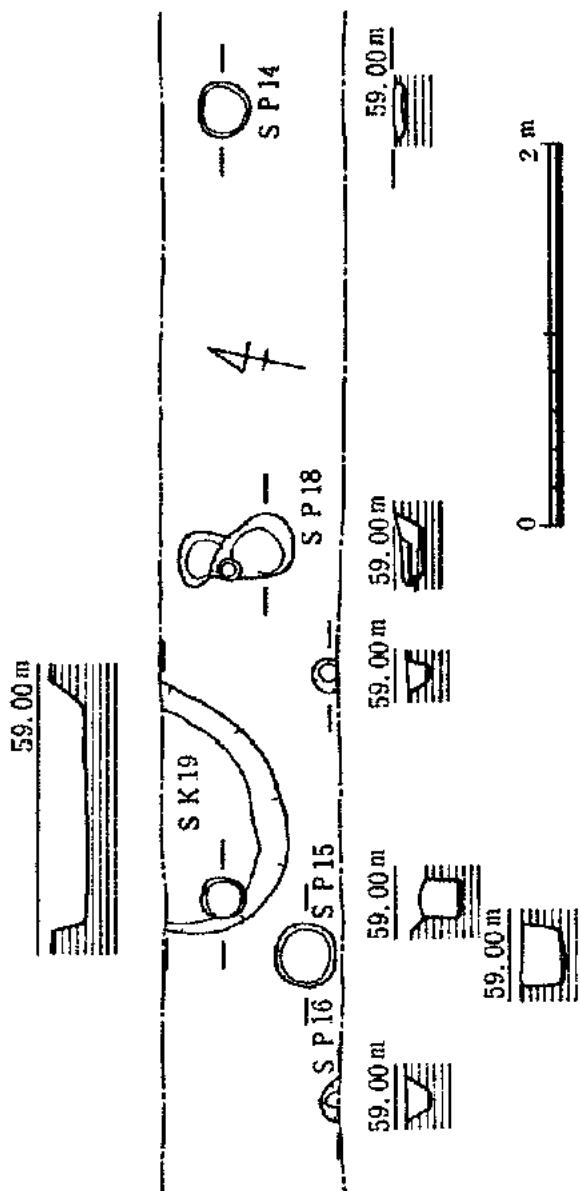
7トレンチの調査時に東西に走る石積みを確認した。この石積みは化粧面を南にむけて、1~3段に積まれている。この石積みは地山上の茶褐色の遺物を多量に包含する土層の上に乗っており、石積みの最下部は東から西に向かって傾斜している。石材は砂岩の割石塊石である。

S X22 (第18図)

S X21の南側2mのところで検出した遺構である。初年度の7トレンチの調査でS X21と別遺構のL字形の平面形を有する石積み遺構として考えていた。ところが8・9拡張トレンチの調査から、この石積みはL字形ではなくL形となり、北側延長部でS X21の石積みと直角にぶつかることがわかった。L形石積みの南側は切れており、石積みは連続しないが、石積みが切れる位置から土層は全体に擾乱を受けており、もともと、この石積みは南へ延びているものと考えられる。石積みはS X21と同様の石材を利用しておらず、最下段の石材は地山面に接している。

このためS X22の石積みは茶褐色の土

器包含層、つまり土壤状の堆積と一体のものである。南側の南北方向の石積みは中途で西側へ一石分、直角に延ばし、次に北側へ延びる。S X21にあたる南北石積みは最下段の石のみを残しており、上部は抜かれたものであろう。S X22がS X21とぶつかった後、S X21の北側では石積み列は途絶えている。ところが11・12トレンチでの土層観察からS X22の茶褐色の土壤状



第16図 6トレンチ遺構実測図 (1/40)

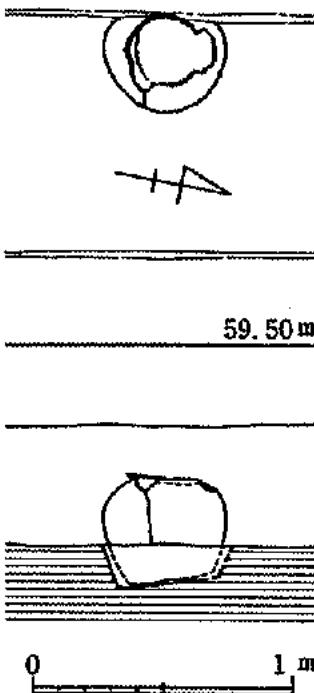
の堆積は連続しており、長さ約17mにわたって直線的に認めることができた。いま、11トレンチでの茶褐色の土壇状の堆積の地山に接するところでは一部に塊石がみられるところから、もと S X 22遺構は南北方向に L 形に石積みを設け、東側の裏込めとして茶褐色の土器を多量に含む土で補填していたものと考えることができる。

S X 28 (第18図)

7・9トレンチで L 形石積み遺構の西へふれた石積みが北へ屈曲する角から西へ延びる石積み遺構である。塊石を利用して 3~4 段に積まれてはいるが、石の面がばらばらである。石積みの最下段は地山面から浮いており石積みの下の土層は黄褐色の地山削出しの土であることから、S X 21・22より後出する石積みであることがわかった。この石積みの石材間には表面に光沢を有する瓦の出土があった。

S X 29 (第12・13図)

現在の拝殿の全面域にあたり、宗像郡誌あるいは神社にのこる近代の絵図には、この位置に楼門が存在している。検出の遺構は土壇内に小礫を配して根石としている土壇が参道の左右の縁に接して存在しており、2基の土壇間はほぼ 2 間分 (3.6m) を測る。また、参道北側の土壇から東へ 1 間分 (1.8m) の位置に根石を配した土壇がある。さらに、参道縁の土壇から北へ 1 間分で小土壇を確認しており、3 間 × 1 間の楼門はこの遺構と重なる可能性がある。



第17図 S X 20 遺構実測図 (1/30)

3) 出土遺物

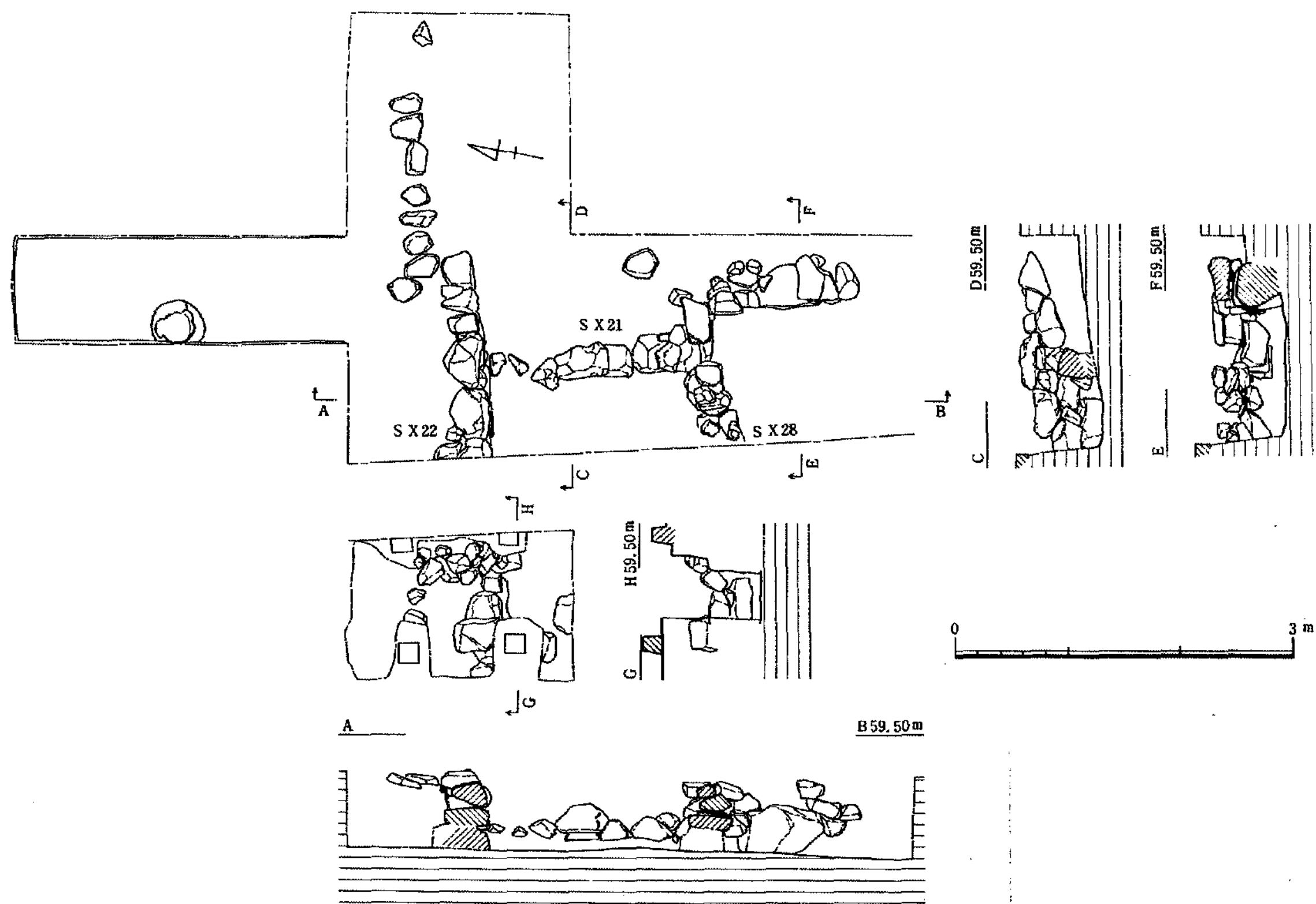
八所宮跡検出の遺物は、おもに各トレンチに共通して確認された地山面直上から堆積している茶褐色土層中から集中的に出土している。その土器包含率は、実に密なもので、土層中の4割ほどをしめている。この土層中から採集された土器群は、土師器を中心とするもので、他に少數の須恵質土器や瓦器、陶磁器類などを混在している。しかし、その土器のほとんどが細片となった状態のもので、現状で完形品となるものは少數であった。

土師器（第19図、第20図）

八所宮跡検出の土師器は、第1表にみる土師器計測表のしめすとおり口徑・器高の法量によりA群B群の2つに大別することができる。このうちA群は、口徑10cm以下のものでその器高が1~2cmに集中するもので小皿となる。また、B群は、口徑10cm以上のものでその器高が2.5~3.5cmに集中するもので杯となる。

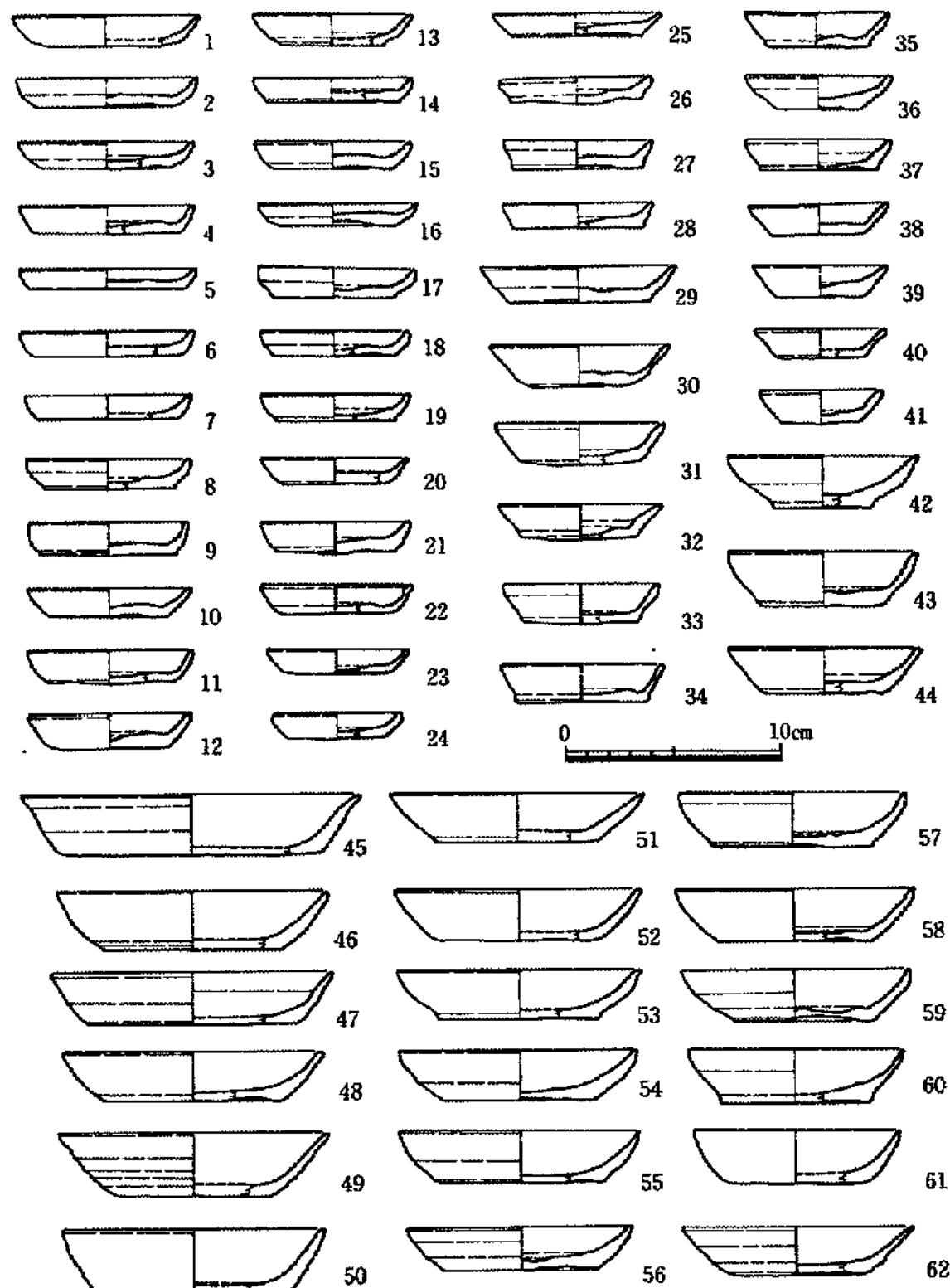
小皿（第19図1~44）杯に比べてその口徑・底径に対する器高の数値が低いものを小皿としている。この類は、その口徑に対する器高や底径の長短によってA類B類に細分することができる。A類は器高が低いもので、B類は器高の高いものである。第19図1~44でみると1~28までがおおよそA類となり、29~44がおおよそB類となるものであろう。さらにこれらの類は、体部の立上りや口縁端部のおさめ方などによって細分できる可能性がある。第19図1~8は、体部が丸みを持っており、口縁部は短く引き上げられ、端部は尖りきみにおさめられている。第19図9~12は、体部が丸みを持っており、口縁部は底部から屈曲して長く引き上げられ、端部は尖りきみにおさめられている。第19図13~19は、体部の丸みがいくぶんみられなくなり、口縁部は短く引き上げられ、端部は尖りきみにおさめられている。第19図20~24は、体部が丸みを持っており、口縁部は短く引き上げられ、端部はやや外反しておさめられる。第19図25~28は、体部が直線的に短く引き上げられ、端部はやや外反しておさめられる。第19図29~34は、体部の丸みがいくぶんみられなくなり、口縁部は底部から屈曲して長く引き上げられ、端部はやや外反しておさめられる。第19図35~41は、体部の丸みがいくぶんみられなくなり、口縁部は底部から屈曲して長く引き上げられ、端部は尖りきみにおさめられている。第19図35~41は、口徑の法量に対して底部の法量が低いもので、器高が高くなる。体部が丸みを持っており、口縁部は底部から屈曲して長く引き上げられ、端部は尖りきみにおさめられている。

杯（第19図45~62、第20図1~25）杯も皿同様にその口徑に対する器高や底径の長短によってA類B類に細分することができる。さらにこれらの類は、体部の立上りや口縁端部のおさめかたなどによって細分できる可能性がある。第19図45~62は、体部が丸みを持っているものでその口縁端部のおさめ方に皿同様に2種類のおさめ方がある。第20図1~13は、体部の丸みが



第18図 SX21・22・28遺構実測図 (1/40)

八 所 宮



第19図 土器実測図1 (1/3)

いくぶんみられなくなつたものでその口縁端部のおさめ方に皿同様に2種類のおさめ方がある。第20図14は、高台の付く大杯である。その高台径は12cmを計り、高台高は1.3cmを計る。第20図20～25は、杯底部も丸みを帯びているものである。第20図15～24は、口径の法量に対して底部の法量が低いもので、器高が高くなる。体部が丸みを持っており、口縁部は底部から屈曲して長く引き上げられ、端部は尖りきみにおさめられている。

須恵質土器（第21図1、第1表00121）

第7トレンチ検出の遺構S T20に据えられたもので底部は欠損し、口縁部は内面方向から打ち欠かれている。器形は、球体を呈し、同部最大径は中央よりやや上部に位置する。器質は、焼きがあまいものか軟質である。土器成形は、底部から口縁部へと仕上げられ、内外面にそれぞれ同心円と水平かやや斜め方向のあらい平行叩きがみられる。口唇部は、下降して上方につまみ上げられる。これらの形態やその調整方法など東播系の須恵器と似かよっている。図示できなかつたものには、東播系の片口の鉢に相当するものとみられるものがある。

陶磁器（第21図2～7）

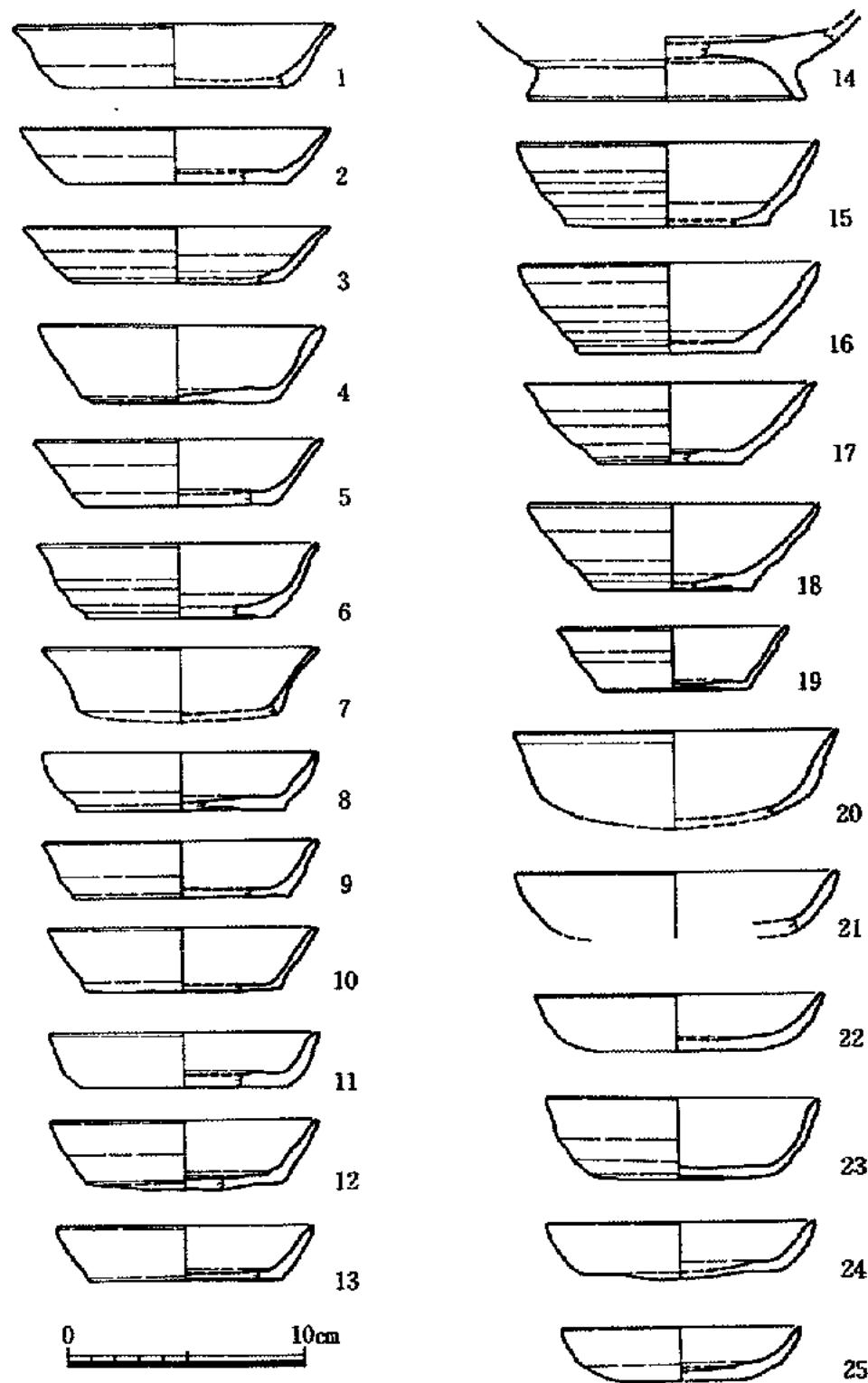
八所宮跡検出の陶磁器は細片のため図示するのに苦慮した。図示できなかつたものについては、その特徴などから計測表にできるだけ表記した。

白磁（第21図2～5、第1表00105～00111） 2は、口縁部の破片で傾きなどは算出できなかつた。口唇部は「く」字方に外反して水平になるもので、白磁碗V類4またはIV類1・3に相当するものであろう。3は、口縁部の破片で傾きなどは算出できなかつた。口唇部は所謂口禿となっているもので、白磁皿IX類に相当するものであろう。4は、口縁部の破片で傾きなどは算出できなかつた。口唇部は玉縁状を呈するもので、白磁碗IV類に相当するものであろう。5は、底部の破片である。内面見込に施釉跡僅き取りがみられ、白磁碗IV類に相当するものであろう。図示できなかつたものには、白磁皿II類1またはIII類1に相当するものやIX類に相当するものなどがある。

青磁（第21図6、第1表00112～00117） 八所宮跡検出の青磁は、龍泉窯系のものばかりで、それ以外の青磁は、現在のところみうけられない。6は、底部の破片である。体部に内面に蓖状施文具による片彫りの線がみうけられることから龍泉窯系青磁小碗に相当するものであろう。図示できなかつたものには、草花文を内面に配す龍泉窯系青磁碗I～2類やII類、蓮弁文を外面に配した龍泉窯系青磁碗I～5類に相当するものなどがある。

陶器（第21図7、第1表00118～00120） 7は、綠味灰色を呈する釉を施している肩部から口縁部の破片である。肩部には2条の沈線を巡らし、暗茶褐色釉を流している。口唇部は断面三角形に仕上げられており、この内面に目痕がみうけられる。この特徴からこの破片は陶器VI

八 所 宮



第20図 土器器実測図2 (1/3)

類に相当するものであろう。図示できなかったものには、黒釉陶器やIV類・V類に相当するものがある。

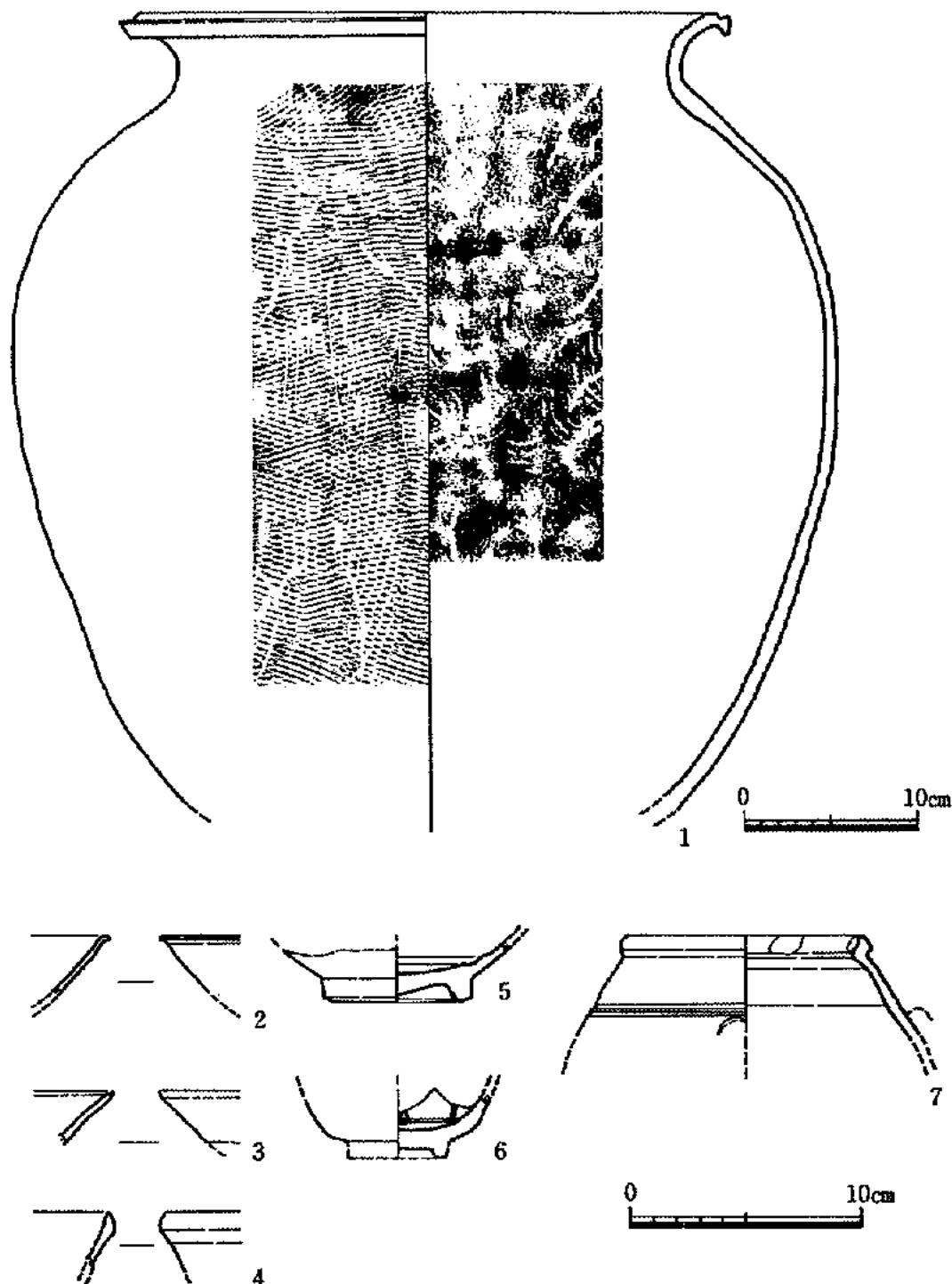
瓦器（第1表00123） 図示できなかったが、高台の付いた椀に相当するものである。

軒先丸瓦（第22図1～4）

1～4いづれも巴文の軒先丸瓦である。1は、面径14cmを計るもので、瓦留めの穿孔が面から11cmほどのところに穿たれている。面には三巴文を配しているが、巴文の足の末端は融合しており、1つのものとなっている。この三巴文の外側には12個の珠文が配されている。2は、面径推定15.7cmを計るもので、面には三巴文を配している。この三巴文の巴の足の末端は分離しており、1の巴文とは型式の違うものである。3は、面径推定11cmを計るもので、面には三巴文を配している。この三巴文の巴の足の末端は接するぎりぎりのもので、外には12個の珠文を配している。4は、面径推定14cmを計るもので、面には三巴文を配している。この三巴文は太い巴によって構成されており、その足の末端は融合している。また、この巴の外には珠文はみられず、直接外縁が取付けられる。

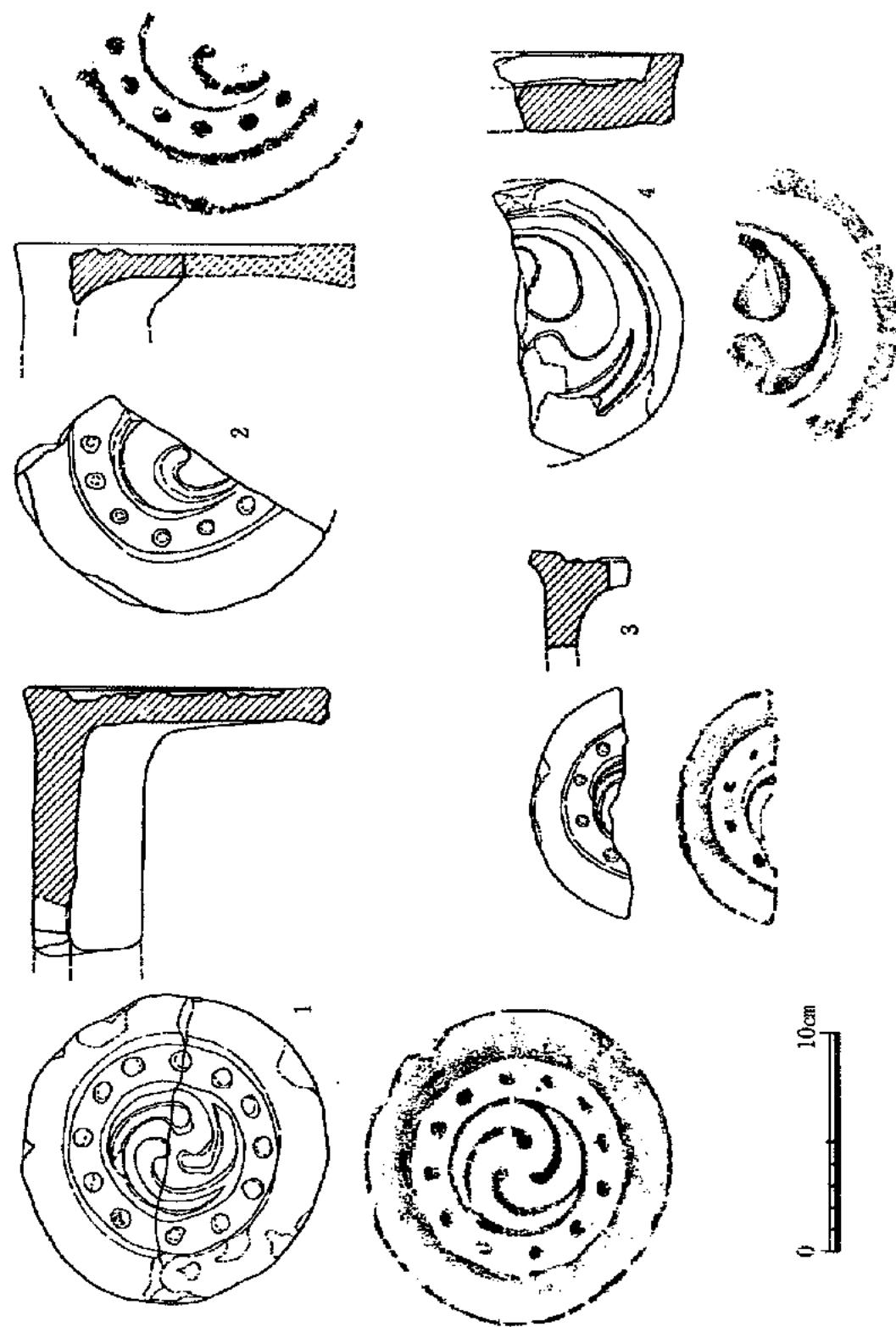
弥生時代の遺物（第23図1～3）

八所宮跡第2・5・7トレンチから弥生時代の遺物を検出しているが、細片のため図示できるものはわずかであった。1は第5トレンチ検出の破片である。推定口径22.8cmを計る。所謂鋤先状を呈する壺形土器の口縁部である。内面は、丁寧なナテ調整を施しており、外面は籠研磨の調整を施している。また、外面にはわずかであるが赤色顔料をみとめることができた。2は、第7トレンチ検出の破片である。底径は、6.6cmを計る。内面はナテ調整を施しており、外面は刷毛目調整を施している。底辺から約1cmのところは、刷毛目調整の後、板状の工具により横方行のナテ調整がなされており、刷毛目調整の端部を消している。また、刷毛目調整の施文方向は右回りの方向である。3は、第2トレンチ検出の太形蛤刃石斧の刃部破片である。刃部は、中央から左よりのところに表面から裏面に抜けての刃こぼれ痕がみうけられる。また、裏面から表面にかけての強い力によってこの刃部は破片となって欠損している。製作痕は刃部と垂直方向かやや斜め方向にみうけられ製作時の刃部研ぎ出し方向が観察される。推定刃部幅約7cmほどで、付刃は、端部より2.5cmほど。石材は硬質の淡黄灰色を呈するものである。図示できなかったものには、第7トレンチ検出の破片で肩部から頸部にかけて3条の突帯を巡らせた壺形土器と考えられるものである。また、同トレンチでは、断面「L」字形を呈する壺形土器の口縁部破片も検出している。

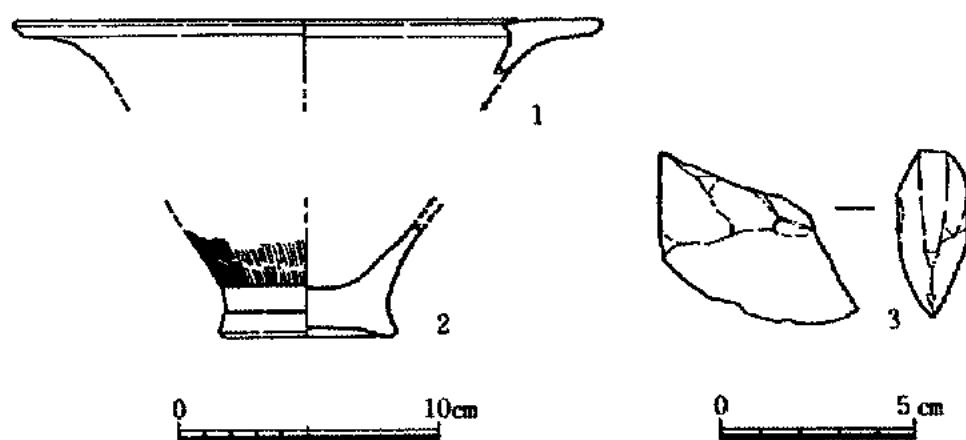


第21圖 瓦底質土器及U陶磁器実測圖 (1/4, 1/3)

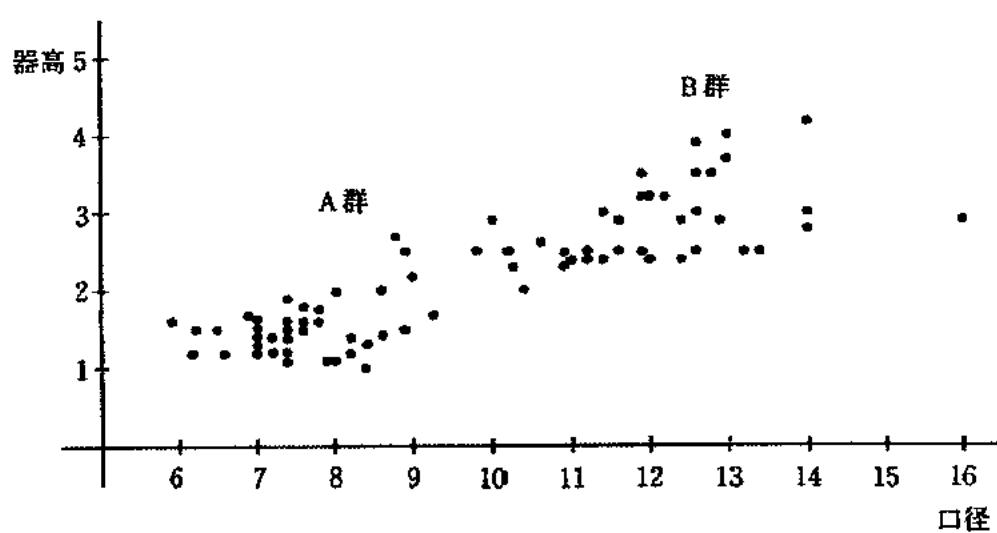
八 所 宮



第22圖 軒九瓦実測図 (1/3)



第23図 弥生時代遺物実測図 (1/3, 1/2)



第24図 土師器の法量分布図 (単位: cm)

表1 出土遺物觀察表 () は復元値

単位: cm

番号	地點	器種	口 径	器 高	底 径	色 調	備 考
19-1	2 T	小皿	(8.8)	(1.5)	(5.0)	黄灰褐色	A
19-2	7 T	小皿	(8.6)	(1.4)	(6.4)	褐 色	A
19-3	2 T	小皿	(8.4)	(1.3)	(6.0)	褐 色	A
19-4	2 T	小皿	(8.2)	(1.4)	(7.0)	黄灰褐色	A
19-5	4 T	小皿	(8.4)	(1.0)	(7.2)	黄灰褐色	A
19-6	2 T	小皿	(8.2)	(1.2)	(7.0)	黄灰褐色	A
19-7	4 T	小皿	(7.8)	(1.2)	(6.6)	黄灰褐色	A
19-8	5 T	小皿	(7.6)	(1.5)	(6.0)	黄灰褐色	A
19-9	6 T	小皿	7.4	1.6	6.4	黄灰褐色	A
19-10	6 T	小皿	7.6	1.5	5.4	黄灰褐色	A
19-11	1 T	小皿	(7.8)	(1.6)	(6.0)	茶褐 色	A
19-12	6 T	小皿	7.6	1.6	5.4	黄灰褐色	A
19-13	5 T	小皿	7.4	1.5	4.8	黄灰褐色	A
19-14	5 T	小皿	7.4	1.2	6.2	黄灰褐色	A
19-15	6 T	小皿	7.4	1.4	5.6	黄灰褐色	A
19-16	5 T	小皿	7.4	1.1	5.2	黄灰褐色	A
19-17	4 T	小皿	7.4	1.5	5.4	茶褐 色	A
19-18	5 T	小皿	7.0	1.2	5.8	黄灰褐色	A
19-19	5 T	小皿	7.0	1.3	5.4	褐 色	A
19-20	4 T	小皿	(7.0)	(1.2)	(4.8)	褐 色	A
19-21	4 T	小皿	7.0	1.5	5.4	褐 色	A
19-22	5 T	小皿	7.0	1.4	5.4	茶褐 色	A
19-23	S X22	小皿	(6.6)	(1.2)	(5.0)	褐 色	A
19-24	8 T	小皿	6.2	1.2	4.6	黄褐 色	A
19-25	4 T	小皿	(8.0)	(1.1)	(7.0)	黄灰褐色	A
19-26	5 T	小皿	7.2	1.4	6.2	褐 色	A
19-27	5 T	小皿	7.0	1.4	6.2	黄褐 色	A
19-28	4 T	小皿	(7.2)	(1.2)	(6.2)	黄灰褐色	A
19-29	1 T	小皿	(9.2)	(1.7)	(6.8)	褐 色	B
19-30	6 T	小皿	8.6	2.0	4.8	黄褐 色	B
19-31	6 T	小皿	8.0	2.0	5.0	茶褐 色	B

番号	地点	器種	口 径	器 高	底 径	色 調	備 考
19-32	6 T	小皿	(7.8)	(1.7)	(5.6)	茶褐色	B
19-33	6 T	小皿	7.4	1.9	5.4	黄灰褐色	B
19-34	6 T	小皿	7.6	1.8	6.2	黄褐色	B
19-35	6 T	小皿	(6.8)	(1.7)	(4.8)	褐色	B
19-36	2 T	小皿	(7.0)	(1.6)	(3.8)	灰褐色	B
19-37	S P 4	小皿	7.0	1.5	5.6	黄褐色	B
19-38	5 T	小皿	6.5	1.5	4.4	褐色	B
19-39	5 T	小皿	6.2	1.5	4.2	黄灰褐色	B
19-40	5 T	小皿	(6.2)	(1.5)	(4.4)	茶褐色	B
19-41	4 T	小皿	5.8	1.6	3.6	褐色	B
19-42	1 T	小皿	8.8	2.5	4.6	褐色	B
19-43	11 T	小皿	(8.8)	(2.7)	(5.8)	褐色	B
19-44	1 T	小皿	(9.0)	(2.2)	(5.6)	茶褐色	B
19-45	4 T	杯	16.0	2.9	12.4	黄褐色	A
19-46	6 T	杯	(12.8)	(2.8)	(8.4)	黄灰褐色	A
19-47	7 T	杯	(13.2)	(2.5)	(9.8)	褐色	A
19-48	2 T	杯	(12.4)	(2.4)	(8.2)	黄灰褐色	A
19-49	7 T	杯	(12.6)	(3.0)	(7.0)	黄褐色	A
19-50	2 T	杯	(12.2)	(3.2)	(9.0)	黄灰褐色	A
19-51	6 T	杯	(12.0)	(2.4)	(7.6)	黄灰褐色	A
19-52	1 T	杯	(11.4)	(2.4)	(7.6)	褐色	A
19-53	2 T	杯	(11.4)	(2.4)	(7.6)	黄灰褐色	A
19-54	6 T	杯	11.2	2.4	7.0	黄灰褐色	A
19-55	1 T	杯	11.2	2.4	7.6	黄褐色	A
19-56	1 T	杯	10.4	2.0	7.0	褐色	A
19-57	1 T	杯	(10.6)	(2.6)	(7.4)	黄灰褐色	A
19-58	S T 7	杯	(11.2)	(2.5)	(7.2)	褐色	A
19-59	4 T	杯	10.8	2.5	6.2	褐色	A
19-60	7 T	杯	(10.2)	(2.5)	(7.0)	黄灰褐色	A
19-61	S X22	杯	(9.8)	(2.5)	(7.0)	黄褐色	A
19-62	1 T	杯	(10.8)	(2.3)	(5.8)	褐色	A

番号	地點	器種	口 徑	器 高	底 徑	色 調	備 考
20-1	2 T	杯	(14.0)	(2.8)	(10.4)	黃灰褐色	A
20-2	5 T	杯	(13.4)	(2.5)	(9.6)	褐色	A
20-3	1 T	杯	(13.2)	(2.5)	(9.0)	茶褐色	A
20-4	7 T	杯	(12.3)	(3.5)	(7.8)	黃灰褐色	A
20-5	2 T	杯	(12.4)	(2.9)	(8.2)	黃灰褐色	A
20-6	2 T	杯	(12.0)	(3.2)	(8.0)	黃灰褐色	A
20-7	2 T	杯	(11.8)	(3.2)	(8.6)	黃灰褐色	A
20-8	4 T	杯	(11.8)	(2.5)	(8.8)	黃灰褐色	A
20-9	2 T	杯	(11.8)	(2.5)	(9.2)	褐色	A
20-10	6 T	杯	(11.6)	(2.8)	(8.4)	褐色	A
20-11	S P 7	杯	(11.8)	(2.5)	(9.2)	褐色	A
20-12	1 T	杯	(11.4)	(3.0)	(8.4)	褐色	A
20-13	2 T	杯	(11.0)	(2.4)	(8.0)	茶褐色	A
20-14	6 T	大杯	—	—	—	黃褐色	C
20-15	6 T	杯	(13.0)	(3.7)	(8.6)	黃灰褐色	B
20-16	6 T	杯	(13.0)	(4.0)	(7.6)	黃褐色	B
20-17	6 T	杯	(12.6)	(3.5)	(6.2)	黃灰褐色	B
20-18	6 T	杯	12.6	3.8	7.0	茶褐色	B
20-19	5 T	杯	10.0	2.8	6.4	黃褐色	B
20-20	2 T	杯	(14.0)	(4.2)	—	茶褐色	A
20-21	2 T	杯	(14.0)	(3.0)	—	茶褐色	A
20-22	2 T	杯	(12.6)	(2.5)	(7.0)	黃灰褐色	A
20-23	5 T	杯	11.8	3.5	7.8	黃灰褐色	A
20-24	2 T	杯	11.6	2.5	8.6	褐色	A
20-25	1 T	杯	(10.2)	(2.3)	(6.1)	黃灰褐色	A

八 所 宮

番号	地 点	器 種	器 形	口 径	器 高	底(台)径	備 考
21-1	S T 20	須恵質土器	甕	33.3	(50.0)	---	東播系
21-2	S K 3	白 磁	碗	--	--	---	V 4 or VII-3
21-3	2 T	白 磁	皿	--	--	---	IX
21-4	5 T	白 磁	碗	--	--	---	IV
21-5	1・2 T	白 磁	碗	--	--	5.5	■
21-6	5 T	龍泉窯系青磁	小 碗	--	--	---	I 2
21-7	S K 3	陶 器	四耳壺	10.2	--	---	VI

*備考表記の記号等は、大宰府陶磁器表示による。 (単位=cm)

整理番号	地 点	器 種	器 形	口 径	器 高	底(台)径	備 考
00105	S K 3	白 磁	皿	--	--	---	II 1 or III 1
00106	2 T	白 磁	碗	--	--	---	V
00107	S K 3	白 磁	碗	--	--	---	V?
00108	S K 3	白 磁	碗	--	--	---	V 4 or VII-3
00109	5 T	白 磁	碗	--	--	---	V 4 or VII-3
00110	5 T	白 磁	碗	--	--	---	IV~V
00111	6 T	白 磁	皿	--	--	6.4	IX 1
00112	7 T	龍泉窯系青磁	碗	--	--	---	I 1
00113	5 T	龍泉窯系青磁	碗	--	--	---	I 1~4
00114	2 T	龍泉窯系青磁	碗	--	--	---	II 2~4
00115	2 T	龍泉窯系青磁	碗	--	--	---	I 5 a
00116	1 T	龍泉窯系青磁	碗	--	--	---	I 5 b
00117	5 T	龍泉窯系青磁	碗	--	--	---	I 5 b
00118	5 T	黒釉陶器	壺?	--	--	---	
00119	4 T	陶 器	壺	6.6	--	---	IV
00120	S X 26	陶 器	壺	9.0	--	---	V
00121	5 T	須恵質土器	鉢	--	--	---	東播系
00122	4 T	瓦質土器	鉢	--	--	---	在地系
00123	2 T	瓦 器	碗			6.0	

*整理番号表記の土器は、図示していない土器である。 (単位=cm)

4. まとめ

宗像市の文化財専門委員会が実施した、文化財の悉皆調査と連動する形で、前後3ヶ年にわたり考古学調査を行ったが、十分な成果を上げることはできなかった。以下に明らかとなった成果について述べる。

遺構

遺構を明確にできたのは2・6-12トレンチであった。2トレンチのSK3土括は全掘できずに性格は不明である。出土遺物から13世紀後半以降のものである。SP群は柱穴跡と考えてよいが、建物の規模は不明である。

6トレンチはSK19土括とSP群を検出したが、建物の規模は明らかでない。

7-12トレンチの調査では、西側外郭を石積みした整地遺構を検出した。これらの遺構は本殿・拝殿のための建替え、拡張に伴うものと考えることができる。SX21は西辺石積みがL形に残っており、南北の長さで15m50cmまで確認できる。南端部は石材が抜かれており、さらに南へ延長部があったものと考える。SX22はSX21の石積みに直交して重なり、東西に直線的に走る石積みである。直交する部分の北側になるSX21の石材は大半が失われており、SX22の拡張石積みの際に抜かれて転用されたものであろう。SX22はSX21との交錯地点から東へ1m、西へ2.5mまで確認できたが、西へのびる石積みの屈曲部は検出できなかった。SX22の東西石積みは11・12トレンチの西端部での黄褐色土層の段落ちの延長線とL字形に交わる可能性がある。SX28はSX21の東西方向の石積みの延長線上にあり、石積みは粗く、最下部はSX21の石積みの上位にあり、浮いた状態となる。

調査における大半の遺物はSX21の裏込め整地層から出土しており、時期的にはSX21遺構より先行する遺物群となる。

ST20の埋納甕はSX21の西辺石積みに接しており、SX21構築時に埋められたものである。甕の内外からは全く遺物の検出はなく、その性格は不明である。この甕はSX21の裏込め整地層出土遺物群より先行するものであり、埋めた時期に疑問が残る。

出土遺物

総面積約90m²の調査であったが、土器が大半であり、各時代のものが出土した。最も古いものは弥生時代のもので、中期の壺、甕、石斧片がある。次には須恵器の破片が数点出土しており、古墳時代後期から奈良・平安時代に入るものであろう。11世紀後半以降出現するものに白磁の碗・皿の小破片が10数点ある。12世紀中頃以降の遺物として龍泉窯系青磁の碗がある。調査遺物に黒色土器は含まない。また、瓦器碗の小破片が数点出土している。12-13世紀のものとして在地の片口鉢とともに東播系(神出窯か)の片口鉢の破片が1点出ている。四耳壺を含む陶器は13世紀後半以降に出現するものである。ST20の須恵質の甕は兵庫県明石市の魚住古窯跡^{注1}のものであり、13世紀に考えられる。瓦は軒丸瓦の1点が桃山時代とされるほかに、これより逆上るものはない。最も多く出土した土器は杯a・bと小皿a・b、それに大杯が1点出土した。^{注2}杯は9.8-16.0cm、小皿は6.2-9.2cmの口径の中にあり、計測値に差があり、相当の時期幅が考えられる。これらの土器は茶褐色土層を主体として、長い時間の累積的神道行為による堆積結果に他ならないことを示しているものであろう。これらの計測値を太宰府調査の資料に求めると、ほぼ13世紀後半(XIX期)~14世紀中頃(XX期)の中に大半

が収まる。一部、小皿aの6cm前後の口径のものは、さらに下るものと考えてよい。20図15~18は杯bと呼ばれる遺物であり、口径12.6~13.0cm、器高3.5~4.0cm、底径6.2~8.6cmと幅があるが、太宰府S D1805の杯bは武丸原遺跡の1号竪穴の杯bに類似するがこれらの遺物より法量は格段に大きいものである。このことからも、杯bは太宰府の土師器XIX・XX期に併行するものであろう。⁴⁴

以上の出土遺物から最も古い石積み遺構S X21は14世紀中頃以降に築造されたものと考えてよい。以後、S X22、28の2度ないし、それ以上にわたる整地拡張を経て、現在の遺構へと続く。S X21整地以前にS T20の壇は作られており、ほぼ100年に近い時間のギャップが存在する。少なくともS X21築造時までS T20として埋置されていたか、他の用途に利用された後に埋置壇として転用されたものと考えられる。

八所宮が文献に現われるのは、宗像宮年中行事（1368年）に「御靈明神」とあり、これが現段階での初現である。⁴⁵ 広島県嚴島神社瀬の梵鐘の池の開陰刻として

「日本国西海道 築前州宗像郡
赤馬庄領主 八所大明神
社頭洪鐘也 應永5年 2月16日 大工 了案」

とある。⁴⁶ 宗像大菩薩御縁起（1444年）には「御靈明神社」とある。宗像御代武家知行帳写（1553年）、宗像大宮司分限帳（1585年）では「吉留村八所宮司分2町」とある。深田千連の宗像宮末社神名帳（1676年）には「御靈明神…八所御靈 吉備大臣」と記載がある。平安時代以降に、非業の死を遂げたものの靈を畏怖し、これを慰和してその祟を免れ安穏を確保しようとする信仰が現われ、文献としては三代實錄貞觀5年（863）に御靈6所の記載が初現とされる。後には吉備大臣（真備）、火雷神（菅原道真）を加えて八所の御靈としたといわれており、今日に至っている。八所宮の成立も、この御靈信仰の中から捉えると考え易い。⁴⁷ 長宝寺の十一面観音像は当初から現在地にあったとは言い難い。発掘調査で明らかになったのは13世紀にはほぼ神社は成立していたであろう。白磁や瓦器類が成立の根拠になれば11世紀段階での成立も可能となる。

考古学的には調査範囲を拡大して建物の検出することが将来における八所宮成立の根拠を与えるものとなろう。

註1 兵庫県文化協会 1983 魚住古窯跡群兵庫県文化財調査報告 第19冊

2 分類は太宰府調査における基準に従った。

3 宗像市教育委員会 1988 武丸原 宗像市文化財調査報告書 第17集

4 山本信天 1990 統計上の土器—歴史時代土師器の編年研究によせて— 九州土代文化論集

太宰府市教育委員会 1987 離振遺跡 太宰府市の文化財 第11集

5 宗像神社史 上巻 1961

7 国史大辞典 11 吉川弘文館

6 大日本史料 7-3

8 宗像都誌 上巻

5. 遺跡周辺の植生

遺跡周辺の植物相については、宗像植物友の会（事務局長梅田政良氏）の1985年3月3日の調査資料を提供いただいた。八所宮の境内には、現在イチイガシとトキワガキの2種類の県指定天然記念物がある。また、神社の南方方向の谷を挟んだ丘陵上にはイヌマキが県の天然記念物に指定されている。調査では51種の植物が明らかになっている。

まき科 イヌマキ	らん科 コクラン・フウラン
まめ科 ノササゲ	かかいも科 シタキソウ
まつ科 モミ	しょうが科 ハナミョウガ
せんりょう科 センリョウ	やまもも科 ヤマモモ
ぶな科 スダシイ・イチイガシ・アラカシ・ シリブカガシ	しきみ科 シキミ
くすのき科 カゴノキ・バリバリノキ・タブ ノキ・クスノキ・ヤマコウベシ ・イヌガシ	つばき科 サカキ・モッコク・ツバキ
とべら科 トベラ	ばら科 モミシイチゴ・リンボク
みかん科 カラスザンショウ	とうだいぐさ科 ヒメユズリハ
うるし科 ハゼノキ	もちのき科 ナナメノキ
あわぶき科 ヤマビワ	うこぎ科 カクレミノ
みずき科 アオキ	つつじ科 シャシャンボ
やぶこうじ科 ツルコウジ・イズセンリョウ	かきのき科 トキワガキ
はいのき科 カンサブロウノキ・ミミズバイ ・クロバイ	もくせい科 ネズミモチ
りんどう科 ツルリンドウ	きょうちくとう科 サカキカズラ
くまつぶら科 ムラサキシキア	ごまのはぐさ科 オオイヌのフグリ
あかね科 クチナシ・コバノニセジュズネノ キ・ヤエムグラ	すいかずら科 ニワトコ
はるとのき科 コバンモチ	もくれん科 オガタマノキ

宗像植物友の会 1986 第135回例会記録かくれみの第13号

付篇 八所神社の文化財

宗像市文化財専門委員会の活動として、昭和61・63年度に実施した委員会調査の資料をここに紹介して、八所宮に関する総合調査の一助として呈示したい。有形文化財の調査は現在継続中であり、追跡調査も含めて未確定の部分が多いことから、調査の細目については専門委員会の報告を待つこととし、所在目録をつくることに主眼を置いていた。図版については、九州大学文学部の林崎价男氏の撮影によっている。各々の資料については、次のとおりである。（単位：cm）

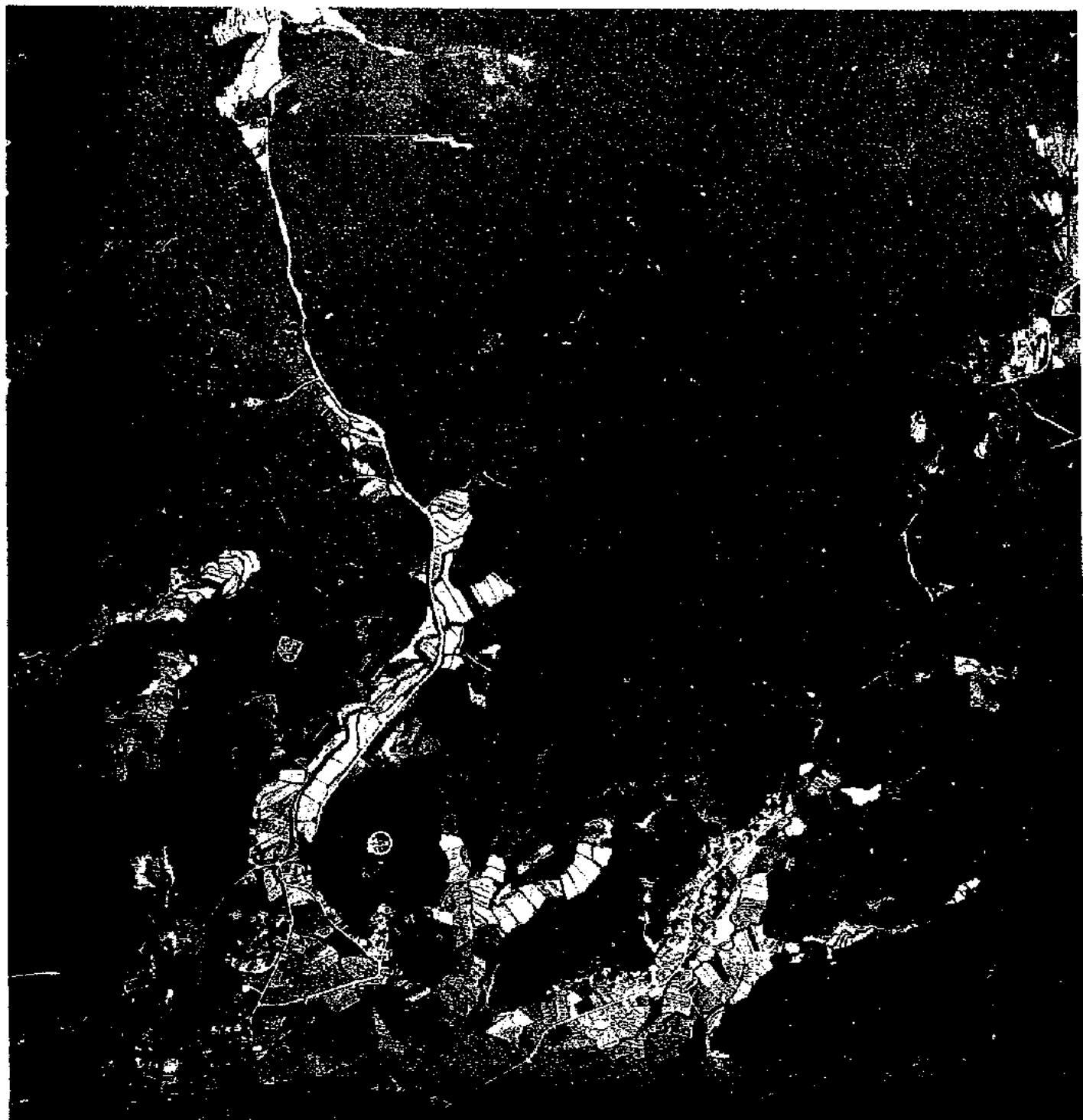
長寶寺（豊福寺）文化財一覧

名 称	品 質・形 状	法 量 (①高 度 ②像 高)	時 代
木造十一面觀音立像	樟 一木造 彫眼	①147.0 ②135.0	平安時代
木造不動明王立像	樟 一木造 彫眼 彩色	① 73.4 ② 59.4	江戸時代
木造十一面觀音立像	樟 寄木造 彫眼 彩色	① 59.9 ② 38.7	江戸時代
木造大威德明王騎牛像	樟 寄木造 彫眼 彩色	①120.2 ② 74.8	鎌倉時代後期
木造不動明王像	樟 一木造 彫眼 彩色	①203.5 頭体部のみ	平安時代後期
木造天部形立像	樟 一木造 彫眼 彩色	①106.5 ② 91.5	鎌倉時代末
木造天部形立像	樟 一木造 彫眼 彩色	①116.0 ②100.1	鎌倉時代末

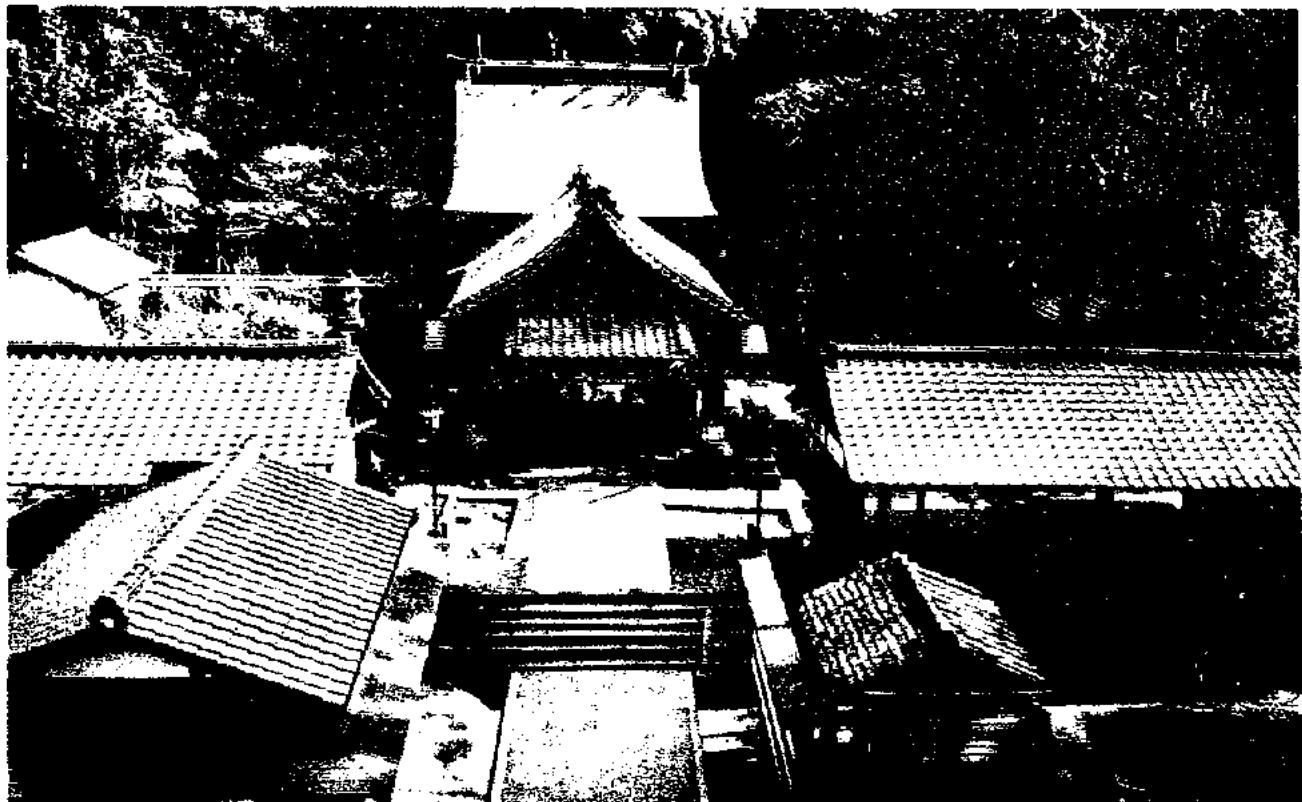
八所神社文化財一覧

名 称	品 質・形 状	法量 (①高さ ②像高さ ③幅 ④横 ⑤径 ⑥体長 ⑦長さ ⑧幅)	時 代
木造狛犬 開形	樟 一本造 彫眼	② 52.1 ⑥ 52.8	室町時代
木造狛犬 吻形	樟 一本造 彫眼	② 58.9 ⑥ 58.3	室町時代
木造狛犬 開形	樟 一本造 丸彫 彫眼	② 48.2 ⑥ 36.9	江戸時代
木造狛犬 吻形	樟 一本造 丸彫 彫眼	② 47.3 ⑥ 44.8	江戸時代
木造鼻高面	樟 彩色	⑦ 22.2 ⑧ 16.4	室町時代
木造翁面	桐	⑦ 14.2 ⑧ 14.0	室町時代
木造鬼面	桐 彩色	⑦ 20.5 ⑧ 17.3	南北朝時代
木造男神面	桐 彩色	⑦ 24.5 ⑧ 13.6	江戸時代
獅子頭	樟 漆塗 上下二材	① 35.2 ⑧ 45.7	江戸時代
獅子頭	樟 漆塗 上下二材	① 33.0 ⑧ 44.7	江戸時代
木杯	樟 漆塗 上下二材	⑤ 66.0 ① 14.1	江戸時代
扁額「八所宮」	樟 陽刻 横書き	③ 73.0 ④ 45.1	江戸時代
木造棟札	杉	③ 169.5 ④ 26.5	宝永六年
銅製梵鐘	銅製 鋳造	① 105.9	応永五年
武者絵馬 (平敦盛)	檜 一枚板	③ 43.6 ④ 66.8	江戸時代
武者絵馬 (熊谷直実)	一枚板	③ 43.0 ④ 66.6	江戸時代
朝鮮出兵团絵馬	杉 四枚板	③ 169.3 ④ 222.7	天保十二年
菊に鳩団絵馬	杉 四枚板	③ 81.2 ④ 120.2	嘉永七年
中国武人団絵馬	檜 四枚板	③ 114.1 ④ 89.7	弘化二年
鹿猪団絵馬	杉 三枚板	③ 64.2 ④ 90.5	天保十一年
孝子団絵馬	檜 四枚板	③ 124.5 ④ 150.2	文久元年
曳馬団絵馬	樟 二枚板	③ 103.3 ④ 87.0	江戸時代
八所大明神御縁起	墨書き 卷子表		天和三年
八所宮參道絵図	墨画 紙本		近代

図 版



遺跡と周辺の航空写真 (1/12,500 1978年6月撮影)



全景写真（西から）



拜殿の南側敷地（西から）



拜殿の北側敷地（西から）



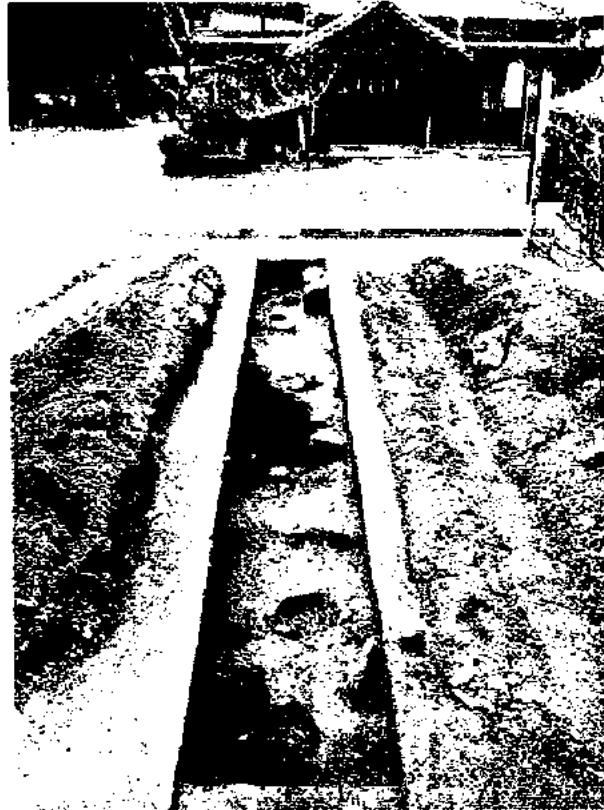
1トレンチ（北から）



2トレンチ（西から）



3トレンチ（北から）



4トレンチ（南から）

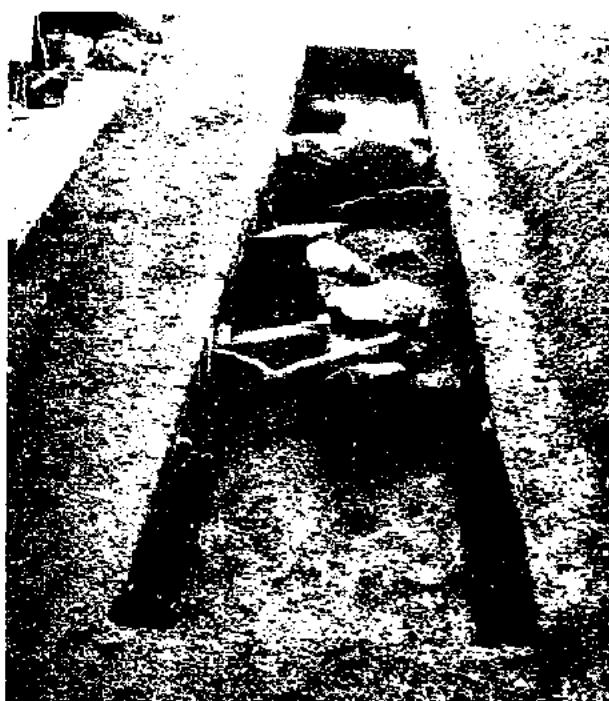


5トレンチ（東から）



6トレンチ（西から）

図版 4



7トレンチ (南から)

八重宮



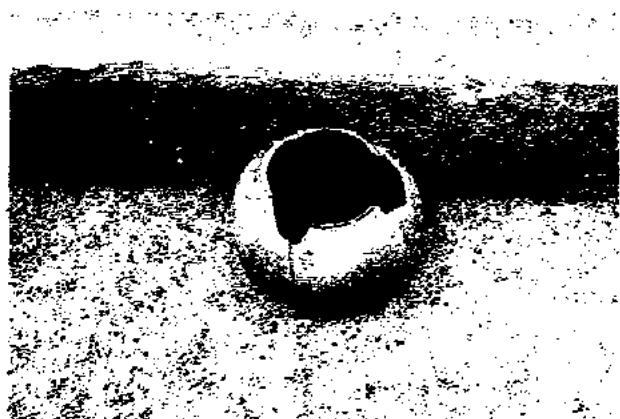
7トレンチ (北から)



S X22 - S T20 (南から)



S X21 - 22 (南から)



S T20 (東から)



S T20掘り方 (東から)



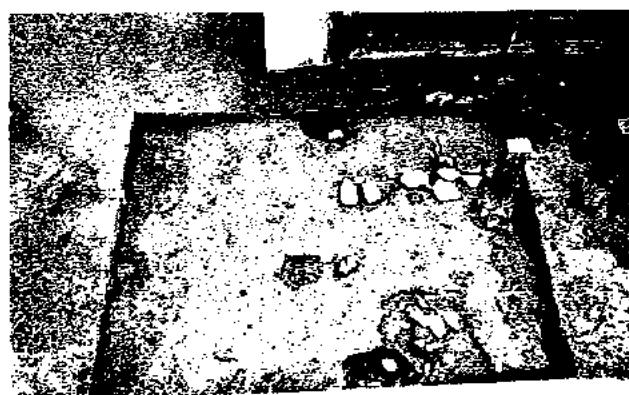
S X21・22・28 (南から)



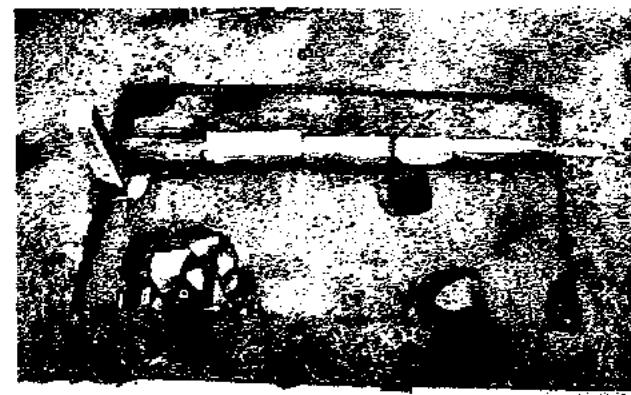
S X21・22・28 (東から)



S X22・28 (東から)



11トレンチ (北から)



12トレンチ (南から)

図版 6

八所宮



長宝寺(西から)



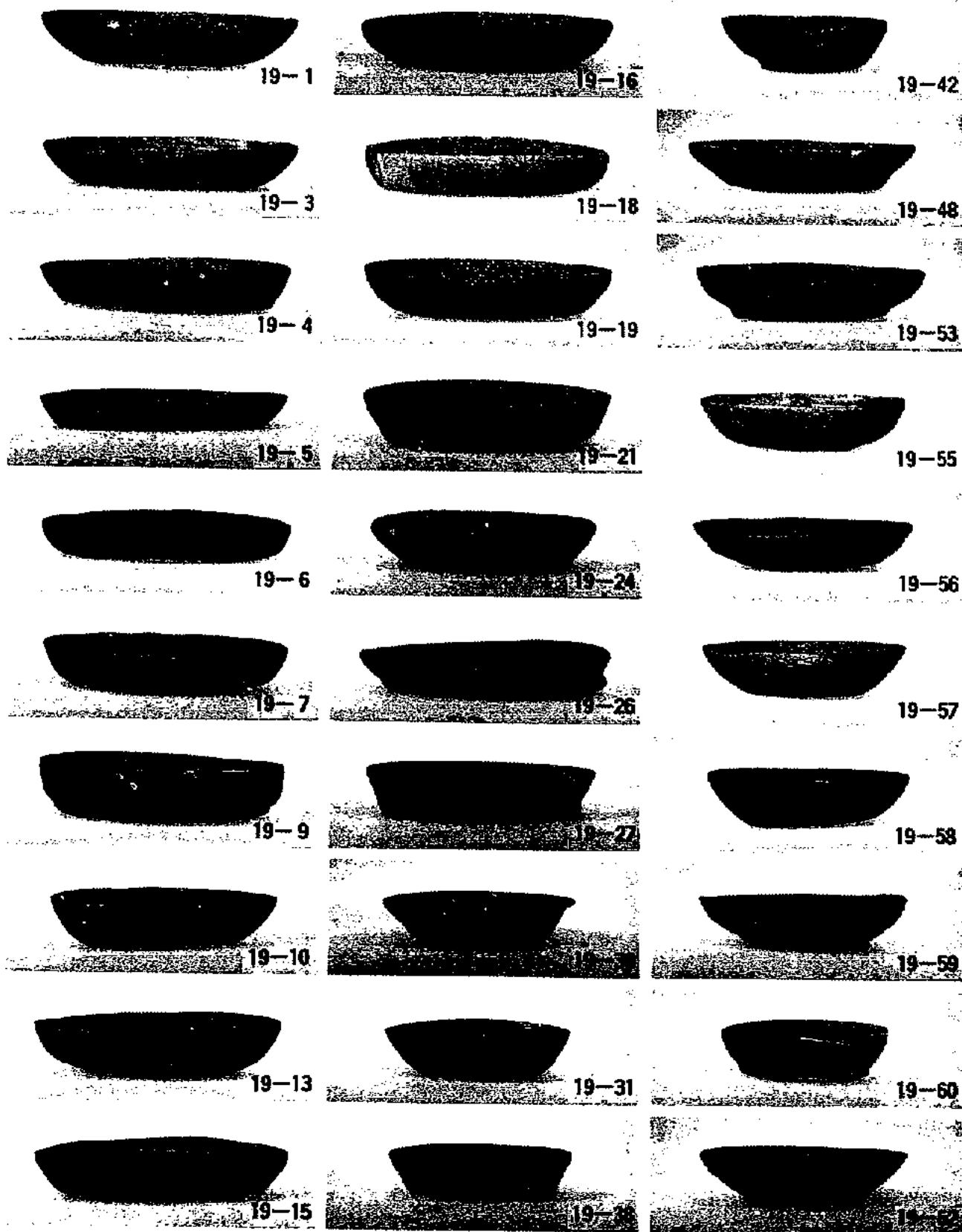
長宝寺観音堂(北から)



長宝寺1トレンチ

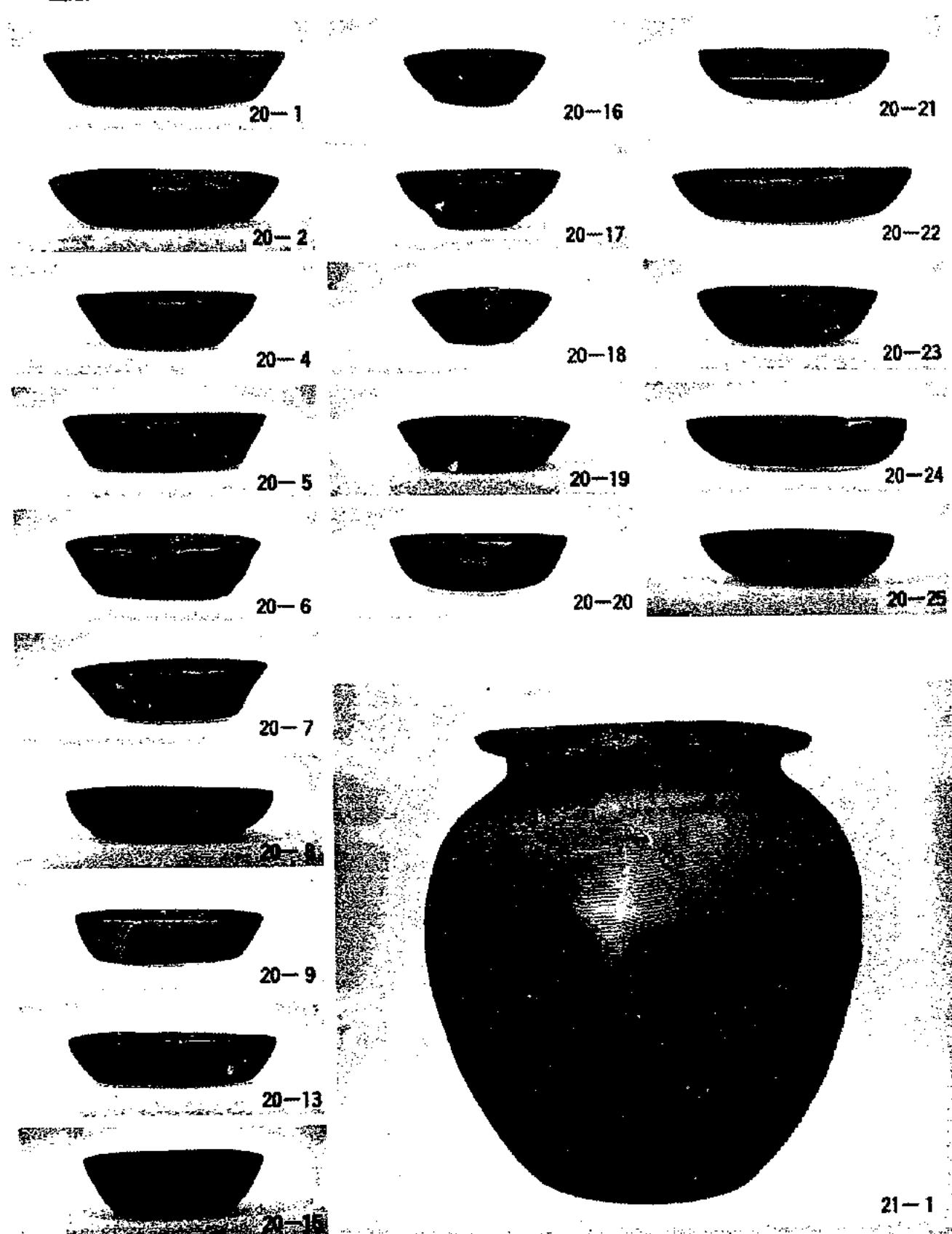


長宝寺2トレンチ



出土遺物 1 (19-1 は19図1の略号である)

図版 8



出土遺物 2 (20-1 は20図1の略号である)



木造十一面觀音立像



木造不動明王立像



木造十一面觀音立像



木造大威德明王騎牛像



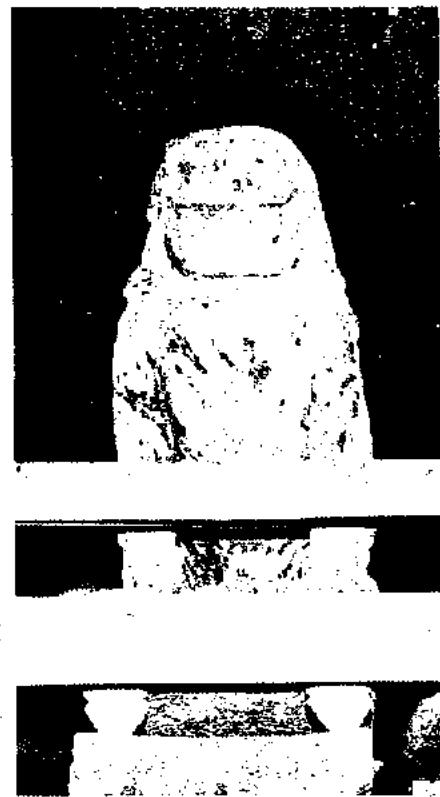
木造不動明王像



木造天部形立像



木造天部形立像



木造狛犬



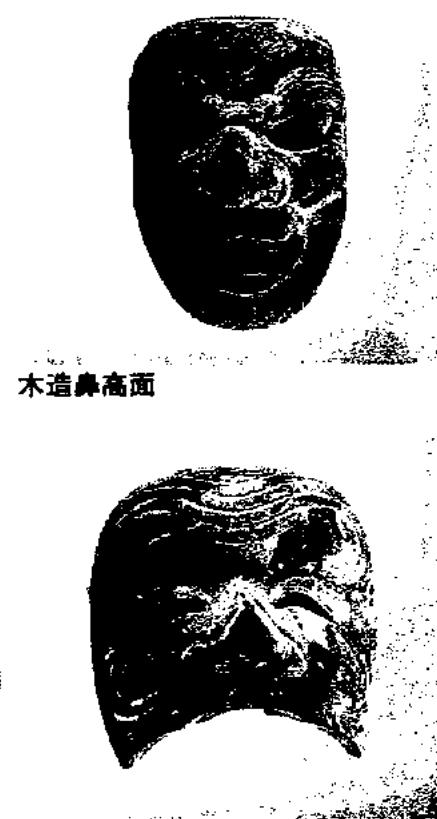
木造狛犬



木造狛犬



木造狛犬



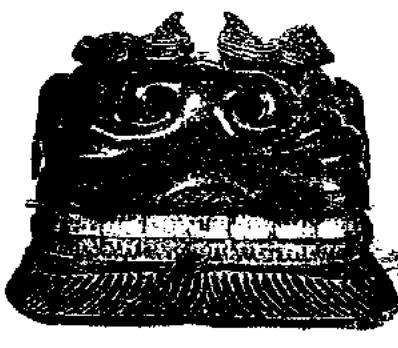
木造狛面



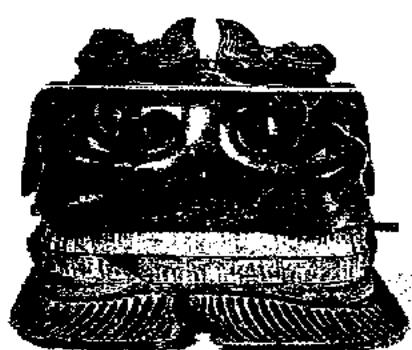
木造鬼面



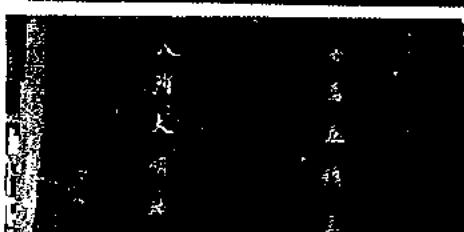
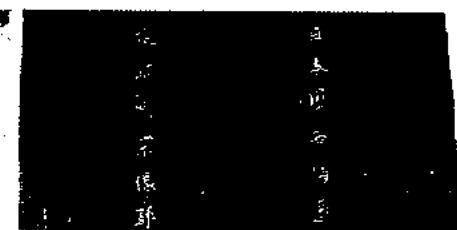
木造男神面



獅子頭



獅子頭



梵鐘の銘



梵鐘



武者絵馬 (平敦盛)



武者絵馬 (熊谷直実)



朝鮮出兵図絵馬



鹿猪図絵馬



曳馬図絵馬



中国武人図絵馬

八 所 宮

宗像市文化財調査報告書 第31集

平成 3 年 3 月 30 日

発 行 宗像市教育委員会
福岡県宗像市東郷 995

印 刷 有限会社システム・レコ
福岡市早良区荒江 2 丁目7-39